

Hiroshima

ひろしまアーツカレント
里山と川辺の複数種共有空間を開いて、
ハイブリッドな学びの場を創発する

令和7年度活動記録集

Arts

Current

ひろしまアーツカレント

里山と川辺の複数種共有空間を開いて、
ハイブリッドな学びの場を創発する

Hiroshima Arts Current

Opening multispecies shared spaces in satoyama and riverside
areas, giving rise to hybrid learning environments

令和7年度 大学における芸術家等育成事業

はじめに

本事業の構想は、二つの実践を基盤として始まった。ひとつは、大学の空き地を里山として開いていくという構想である。もうひとつは、Yellow River Collegeが展開してきた「100年後に土に還る家」を目指す古民家改装の実践である。1994年に里山を切り開いて建造された大学と、山間の川辺に面した古民家。両者の隔たりを意識しながら、私たちは次の問いを立てた。大学と過疎地の生活の場は、いかにして多種共生のエコロジーを育み、その経験をアート実践として鍛え直すことができるか？ このテーマを異なる場所で展開する他の活動とも連携し、点と点を結び直したい。点はやがて線となり、線は流れとなる。川のように、場所と場所をつなぐ水の循環として、いくつかの取り組みを展望してみたい——それが本事業の挑戦である。

ただし本事業は面としての広島市や広島県内外に広がる産業と自然のエコロジー循環を、網羅的に把握しようとするものではない。規模は限定的であり、既に積み重ねられてきた環境活動の厚みに比べれば、見え方として心許なく映る可能性もある。アートがエコロジーを語る時、それが創作の流行語を借りたものだ、と見なされることもあるだろう。

そもそも、美術の制作は歴史的に多くの素材と廃棄を伴い、環境への負荷と無縁ではない。作品の搬入・展示に伴う物と人の移動は、運搬コストを高めるという矛盾も抱える。それでもなお、もし本プロジェクトが「複数種共有空間を開く」ことにつながるとすれば、講師陣や受講生、そして多種の自然が、身体を通して新しい関係性を育むという経験を通してしか理解されない。SNSのコミュニケーションやAIの知能が代替できないのは、こうした場と時間に触れる感覚のリアリティである。

本記録集は、活動の概要を伝えるものである。しかし未知の活動に参加者が体験し、考えが浮かび、複数種が織りなす自然に対する新たな責任が芽生えた——その実感は、記録される言葉や写真からこぼれ落ちざるを得ないだろう。それでもなお、本記録集が、異なる場所で無関心に並走してきた諸活動の足跡に気づききっかけとなり、それらの交差点が将来の別の出会いへと開かれることを願っている。

広島市立大学 芸術学部 芸術学研究教育イニシアティブ学環 准教授
石谷 治寛

Introduction

The concept for this project began with two foundational practices. Project 1 envisions transforming vacant university land into a satoyama landscape. The other draws on Yellow River College's ongoing practice of renovating traditional Japanese houses to create "homes that return to the earth in 100 years." One is a university established in 1994 through the clearing of satoyama woodland; the other is a traditional Japanese house facing a riverside in a mountain valley. While remaining conscious of the gap between these two sites—the university campus and traditional Japanese house—we posed the following question: How can living spaces within a university and in depopulated regions cultivate an ecology of multispecies coexistence? And how might such experiences be reforged through artistic practice? This project seeks to reconnect these sites and activities, allowing points to form lines and lines to become flows. Like a river—the circulation of water linking place to place—we wish to look ahead toward several such endeavors. This is the challenge this project takes on.

However, the project does not aim to comprehensively grasp the industrial and natural ecological cycles that spread across Hiroshima City, Hiroshima Prefecture, and beyond. Its scale is limited, and compared with the accumulated depth of long-standing environmental practices, it may appear modest and tentative in its scope. When art speaks of ecology, there will be those who view it as merely borrowing the fashionable vocabulary of creative discourse.

Fundamentally, artistic production has historically involved extensive material use and waste, and is not unrelated to environmental burden. The movement of objects and people involved in transporting and displaying works carries its own contradiction—one that drives up the costs of conveyance. Even so, if this project contributes to opening multispecies shared spaces, its meaning can only be grasped through the experience of instructors, participants, and diverse forms of nature alike cultivating new relationships through their embodied presence. Neither social media nor AI can replace the sensory reality of direct engagement with places and times.

This record presents an outline of these activities. Participants encountered the unknown, ideas surfaced, and a renewed sense of responsibility toward a nature woven by multiple species began to take root—yet such lived experiences inevitably spill beyond what any recorded words or photographs can hold. Even so, we hope this record may serve as a moment of recognition—that various activities which have run in parallel, largely unaware of one another across different places, have left traces, and that these points of intersection may open toward future encounters in different places.

Hiroshima City University
Faculty of Arts, Inter-departmental Initiative in Art Studies
Associate Professor

ISHITANI Haruhiro

目次

- 02 はじめに
Introduction
- 05 ひろしまアーツカレントについて
About Hiroshima Arts Current
- 09 キックオフ・シンポジウム 報告
Kickoff Symposium Report
- 13 プロジェクト1
キャンパスにアートと複数種の共生空間としての里山を創造する
Project 1 Creating a Satoyama on Campus: A Shared Habitat for Art and Multispecies Worlds
- 33 プロジェクト2
文化芸術と自然環境について地域から考え、国際的な実践から学ぶ
Project 2 Considering culture, the arts, and the natural environment locally, while learning from international practices
- 47 プロジェクト3
空き家の解体と合体。枠組みから外れた余剰分を、再び生活圏へ呼び戻す
Project 3 Dismantling and recombining vacant houses—reclaiming surplus spaces beyond existing frameworks and returning them to everyday life
- 57 プロジェクト4
広島市における自然環境の活用方法を体験し、その賑わいをつくる
Project 4 Exploring ways to engage with Hiroshima’s natural environment and cultivate new forms of vitality
- 69 プロジェクト5
太田川を遡上して、その文化と歴史を響かせ映す
Project 5 Tracing the Ota River upstream, reflecting and resonating with its culture and history
- 85 プロジェクト6
自然・文化芸術資源の記憶にアクセスし、利活用する
Project 6 Accessing and activating the memory of natural and cultural resources
- 97 活動報告会・シェアリングセッション
Activity Report Meeting and Sharing Session
- 100 プロジェクト代表者紹介
Project Leader Introduction

Hiroshima

ひろしまアーツカレントについて

About Hiroshima Arts Current

Arts

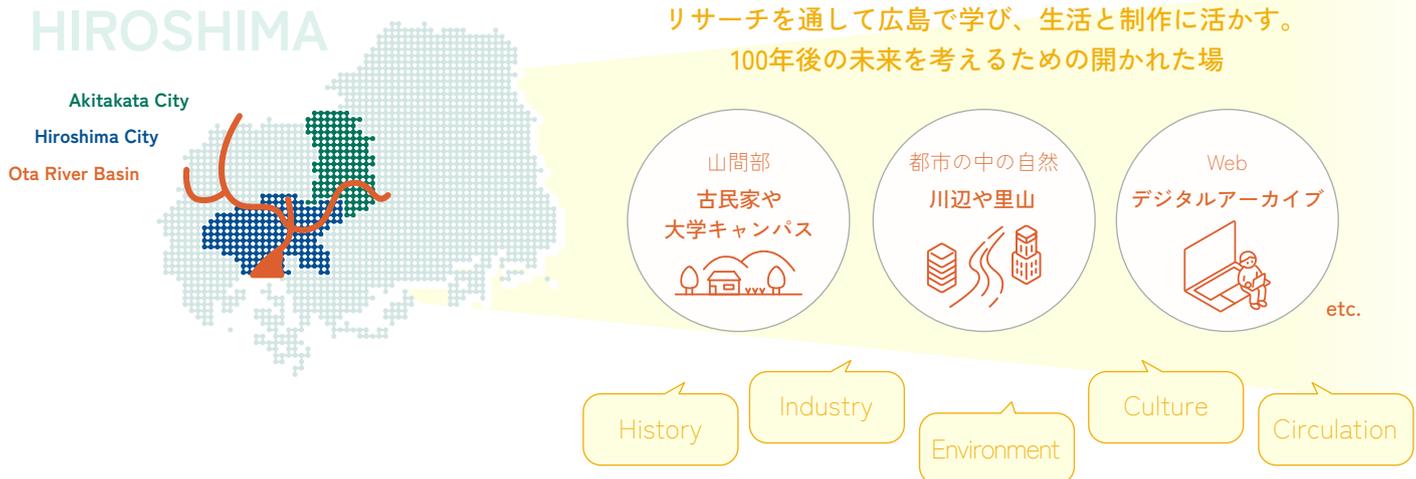
Current

広島は、太田川の水系を産業文化の基盤として、近代的な街づくりを発展させてきました。その空間のエコロジーと歴史を調査しながら、大学キャンパスや山間部の川辺にある古民家、都市の中の川辺や里山、デジタル・アーカイブを共有空間として活用する文化芸術活動の実践を通して、未来の学びの場を開きます。

6つのプロジェクトでは、それぞれ固有の自然環境に根ざしながら、芸術家やデザイナーや写真・映像作家らが、地域の文化・自然資源を育む実践者、農家、地質学者、建築家、エコロジー実践者、市民団体メンバー、ギャラリスト、アーキビストらとの共働を通して、100年後の未来を見据えた循環型で複数種共生が可能な場所づくりについて、ともに学び考え、アートと場づくりの実践を目指します。

Hiroshima has shaped its modern urban fabric around the Ota River system, which has long underpinned its industrial and cultural life. By investigating the ecology and history of the region, and through cultural and artistic practices that engage university campuses, old Japanese houses along rivers in mountainous areas, riverside and satoyama areas within the city, and digital archives as shared spaces, Hiroshima Arts Current opens up future learning environments.

Across six projects rooted in distinct natural environments, artists, designers, photographers, and video artists collaborate with practitioners who nurture local cultural and natural resources, farmers, geologists, architects, ecological practitioners, members of civic groups, gallerists, and archivists. Together, they will learn and reflect on the creation of circular, multispecies coexistence spaces, envisioned over the next hundred years, aiming to realize art and place-making practices.



2025年度の活動

(1)

キャンパスにアートと複数種の共有空間としての里山を創造する

Creating a Satoyama on Campus: A Shared Habitat for Art and Multispecies Worlds

大学の空き地を活用し、土や生物と共生する農空間を創出する。植生や地質をアートの視点で再認識し、共生型の里山を大学キャンパス内で育むことを目指す。

(2)

文化芸術と自然環境について地域から考え、国際的な実践から学ぶ

Considering culture, the arts, and the natural environment locally, while learning from international practices

T.J.デモス著『自然を脱植民地化する』の粗訳を基にした公開オンライン勉強会を実施し、国際的なエコロジー芸術の理論と考えを学び、議論する。

(3)

空き家の解体と合体。枠組みから外れた余剰分を、再び生活圏へ呼び戻す

Dismantling and recombining vacant houses—reclaiming surplus spaces beyond existing frameworks and returning them to everyday life

古民家の廃材を再利用しながら循環型の場所づくりを学び、資材や施工法を理解し、空間デザインや作品に活かせる創造力を育む実践を行う。

(4)

広島市における自然環境の活用方法を体験し、その賑わいをつくる

Exploring ways to engage with Hiroshima's natural environment and cultivate new forms of vitality

広島で自然と共存する歴史文化を市民団体から学び、現地調査を通じて芸術的関わり方を模索する。都市と自然をつなぐ創造的な人材を育成する。

(5)

太田川を遡上して、その文化と歴史を響かせ映す

Tracing the Ota River upstream, reflecting and resonating with its culture and history

広島でかつて盛んだった舟運で使用された「雁木」に焦点をあて、太田川を舞台としたパフォーマンスプログラムを展開する。

(6)

自然・文化芸術資源の記憶にアクセスし、利活用する

Accessing and activating the memory of natural and cultural resources

アーカイブ資料を、創作へ利活用する方法を学ぶ。また、文化芸術資料を共有のデジタル・アーカイブ・システムへ整理・登録するために、それぞれの専門性を活かした協働作業を行う。



キックオフシンポジウム報告

Kickoff Symposium Report

Symposium

ひろしまアーツカレント 里山と川辺の複数種共有空間を開いて、 ハイブリッドな学びの場を創発する キックオフ・シンポジウム

日 時 2025年6月23日（月）13:00-14:30

会 場 広島市立大学 講堂小ホール

登壇者 石谷治寛（広島市立大学芸術学部准教授）

長坂有希（広島市立大学芸術学部講師）

福田恵（Yellow River College）

藤江竜太郎（広島市立大学芸術学部准教授）

吉田真也（リフレクティング・ヒロシマ）

湯浅正恵（広島市立大学国際学部教授）

ひろしまアーツカレント事業の6つの活動におけるそれぞれの代表教員、講師が登壇し、広島のと川を基底としたそれぞれの取り組みと活動目標についてプレゼンテーションを行った。その後、湯浅正恵氏をコメンテーターとして、現在国際的な問題となっている紛争、侵攻の実状を認識するとともに、エコロジーを自身の身近なものとしてどのようにアートと結びつけ、具現化していくか、本事業の展望を踏まえ討議を行った。広島は昨年被爆80年を迎え、世界的な核問題への注目も高まっているなかで、自然環境、エコロジーと密接に関わっていく本事業の意義を改めて考え、共有する機会となった。



「複数種共有空間を開く」ということ

湯浅正恵（広島市立大学国際学部教授）

こんにちは国際学部の湯浅です。専門は社会学です。私も実はこのプロジェクトとの一員として、川辺の家での学びの場を計画していたのですが、残念ながら実現までに至りませんでした。ということで今日は、「複数種共有空間を開く」ことについて、特に「自然の脱植民地化」の意義について話したいと思います。自然の脱植民地化プロジェクトは、加害側、植民者側である私たち人間が、「弱き被害者である自然」のために、自然を助けるプロジェクトではなく、荒れ狂う自然を宥めて、なんとか人間種が生きながらえるためのサバイバル戦略でもなく、自然と私たちとの暴力的関係性に終止符をうち、その中でとことん歪められた私たち人間の精神と身体を救い出すための数少ない残された手段のように思っています。キーワードは「主権」です。

2023年10月に開始されたイスラエルによるガザ攻撃は1年8ヶ月を超え、5万人以上のパレスチナ人を殺戮しています。ガザの人口210万人の全員が水、食料、医薬品を断たれ、飢餓の危機にさらされていると国連が警告して1ヶ月が経過しました。近年稀に見る人道危機が起っています。それでもイスラエルは爆撃を継続し子どもの死者は16000人を超えました。そしてさらに13日にはイランの核施設を攻撃するという暴挙で、とうとう昨日この虐殺を継続するための核攻撃という狂気に、アメリカまで引きずり込んでしまいました。このような状況を私たちは毎日さまざまなメディアを通して見てきましたが、国際社会はそれを今日まで止めることができていません。そればかりか、先日のG7サミットは国際秩序を支えるはずのいわゆる「大国」が、イスラエルを批判するどころか、イスラエルの攻撃を「自衛」と擁護する共同声明をだしています。

1948年に建国されたイスラエルの歴史は、その始まりから今日まで、一貫してパレスチナ人との「共生」を拒否し「植民地化」する歴史だったといえるでしょう。しかしそれは、イスラエルだけの問題でしょうか。パレスチナの地でパレスチナ人が故郷から追い出されている状況を国際社会が今日まで許し続けてきました。そして私たちもその国際社会の一部であるという事実には、私は恐怖します。虐殺され餓死していく子どもたちを私たちはみています。これが人間の行為なのか、一体私たちは何をまちがってしまったのかと問わざるをえません。

自らがユダヤ人としてナチスドイツの迫害により無国籍となった思想家のハンナ・アーレントは、共生を「この世界に誰がすみ、誰がすんではならないか決定することはできないこと」と定義しました。そして異なる人々がともに住むこと、つまり「複数性 (plurality)」を人間の条件としたのです。そして、この人間の条件である複数性に矛盾するものとしてアーレントが批判の矛先を向けたのが「主権」でした。主権性を「単一性による暴力的な支配体制」とし、「地球に住んでいるのはひとりの人間ではなく、複数の人々であるため、誰も主権者になりえない」とアーレントは述べています。このアーレントの言葉を借りるなら、イスラエルは主権国家として、ひとりでパレスチナの地に住もうとしています。他の国家も「主権」者として領土を支配しているのであり、主権国家が「主権」を行使するイスラエルを止めることができないのは当然のことかもしれません。こうして国際社会は「主権」を基本原則とするために、複数性、つまり共生を、原理的に犠牲にすることになっています。

それでは私たちはどうでしょうか？ 私たち自身は本当にパレスチナ人とイスラエル人の「共生」を求め、イスラエルを心の底から批判できてきたのでしょうか？ 自分が生きるために邪魔になるものは排除しても仕方ないとどこかで思っていないのでしょうか。私がそのように不安になるのは、私自身が共生を求め実践しているようには思えないからです。





私たちは言うまでもなく生命体として、生態系の一部として他の生物とともに生きています。土の中のミミズや微生物、水の中の海藻や底生生物、すべての生き物が役割をもってつながりこの地球の生命活動を支えています。そして私たちはそうした数限りない他の生き物の生命活動に依存して生きています。それぞれの場所に特有の植物や動物が生存します。そうした動植物の生命活動は、地理的・生態的特徴を作り出し、そこに固有の人の文化が育まれました。しかしそうした自然とともにあった私たちの文化の多くを近代化は破壊していきました。そして現在、私たちの日常は「人間主権」による暴力的支配構造、つまり「自然の植民地化」が常態となったと言わざるを得ません。

私たちが主権者たることをやめる。他のいきものの命のざわめきの中で、その充満するエネルギーを、喜びをもって感受しながら、他の生物との共生を目指し、この場に「再定住」を試みる。そのための学び、それがこのプロジェクトだと私は思っています。そうした学びは、自然の脱植民化の第一歩であり、私たち自身の植民地主義からの脱却の第一歩となるでしょう。今、この場での共生の学びこそが、危機的状況にある世界を立て直す一歩にもなると思っています。

湯浅 正恵 YUASA Masae

社会学/広島市立大学国際学部教授

日本の平和主義、広島と核をテーマに *Challenging Nuclear Pacifism in Japan: Hiroshima's Anti-Nuclear Social Movements* (2024, Routledge) を出版し、この研究をさらに Arts-Based Research の手法で広げ/深めていく方法を模索中。日本平和学会では2019年から芸術と平和分科会責任者として活動している。

プロジェクト1

キャンパスにアートと複数種の共生空間 としての里山を創造する

Creating a Satoyama on Campus: A Shared Habitat for Art and Multispecies Worlds

プロジェクト代表

長坂有希（アーティスト/広島市立大学芸術学部講師）

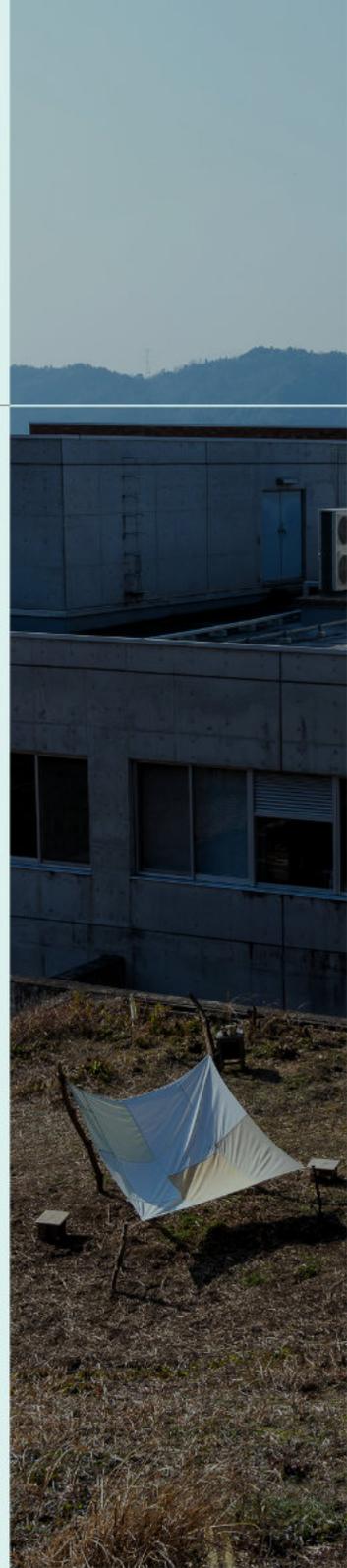
プロジェクトコーディネーター

堀口智尋（広島市立大学芸術学部現代表現領域4年）

キャンパスにアートと複数種の共生空間としての里山を創造する

大学キャンパス内で空き地になっている土地を利用し、土や他の生物と共生することを実践的に学ぶための農空間を創造します。農空間を中心に据え、キャンパス内にある植生や大学周辺の自然環境や地質をアートの目線から再認識し、キャンパスに複数種の共生空間としての里山を作り出します。植生、地質、土についてのリサーチを通して、若手美術家にエコロジカルアートを実践し、共に学ぶ機会を作りだします。

We aim to create an agricultural space on vacant land within the university campus to provide hands-on learning about coexistence with soil and other living organisms. Centered on this space, we will re-examine campus vegetation, the surrounding natural environment, and local geology through an artistic lens, shaping a satoyama as a multispecies shared habitat within the campus. Through research into vegetation, geology, and soil, we will create opportunities for young artists to practice ecological art and learn together.



2025年度プログラム

Satoyama in Movement—ここに根をはり、共に生き、栄える—

フィールドワークを通してキャンパス周辺の地形と地質について学ぶ

日時 2025年7月12日（土）13:00-18:00

会場 広島市立大学、大学周辺地域

講師 熊原康博

フィールドワークを通してキャンパス周辺の植生について学ぶ

日時 2025年9月13日（土）13:00-17:30

会場 広島市立大学、大学周辺地域

講師 吉田晴彦、川本誠、梶山健治

フィールドワークを通してキャンパス周辺の植生について学ぶ 応用実践編

日時 2025年10月9日（木）13:00-19:30

会場 広島市立大学

講師 山本愛子

植物・土・鉱物などの採集物を使って、特殊印刷を行う

日時 2025年11月1日（土）- 3日（月）13:00-18:00

会場 広島市立大学

講師 吉田勝信

Satoyama in Movement—ここに根をはり、共に生き、栄える— 初年度活動成果展『触』

日時 2026年2月6日（金）- 11日（水・祝）10:00-17:00

会場 広島市立大学内農空間予定地と現代表現ラボラトリー

Satoyama in Movement—ここに根をはり、ともに生き、栄える—

初年度活動成果展『触』 関連トークイベントと講評会

日時 2026年2月8日（日）12:00-17:00

会場 広島市立大学

講師 石倉敏明、石谷治寛、長坂有希

フィールドワークを通してキャンパス周辺の 地形と地質について学ぶ

日時 2025年7月12日（土）13:00-18:00

会場 広島市立大学、大学周辺地域

講師 熊原康博

今年度、最初の活動として、地理学者の熊原康博氏を講師に迎え、広島市立大学のキャンパスとその周辺地域の地形および地質について学ぶワークショップを開催した。

屋内ではスライドレクチャーに加え、明治時代と現代の地図の比較や色塗りのワークを通して、大学周辺の地形の成り立ちと変化を地質時間と人間の歴史という二つの時間軸から読み解いた。また、土地利用の変遷や地質の特徴が土石流などの災害とどのように関係しているのかについても学んだ。

その後、野外でのフィールドワークを行い、露頭や河川争奪の痕跡、江戸時代や明治時代に使われていた街道、高速道路の上に通された農業用水などを実際に観察した。事前に知識として学んだ内容を身体を通して現場で経験することで、地形や地質をより具体的なものとして理解する機会となった。

日常的にすぐそばにありながらこれまで意識することのなかった場所や事象に出会い、普段は立ち入ることのない雑木林を歩く中で、参加者それぞれの感覚と身体が周囲の環境へと開かれていく様子が印象的だった。





フィールドワークを通してキャンパス周辺の 植生について学ぶ

日時 2025年9月13日（土）13:00-17:30

会場 広島市立大学、大学周辺地域

講師 吉田晴彦、川本誠、梶山健治

二回目の活動として、国際政治学者の吉田晴彦氏を講師に迎え、広島市立大学のキャンパスとその周辺地域の植生について学ぶワークショップを開催した。

キャンパス内の植生、とりわけ造成された区域と、造成されることなくかつての姿をとどめている雑木林との境界に注目しながら観察を行った。人々の生活の中で利用されてきた有用植物が現在も自生している様子を確認し、植生が過去の土地利用や人間の営みと深く結びついていることを学んだ。

その後、この地域で生まれ育ち、現在も農業を営んでいる川本誠氏と梶山健治氏のもとを訪ね、手作りの農具や露頭を利用して作られた貯蔵庫、畑の様子などを見学した。

大学に戻ってからは、吉田氏、川本氏、梶山氏を囲み、大学が造成される以前の地域の暮らしや農業、動植物との関わり、生きるための知恵、そして近年の里山環境の変化について話を伺った。

現在の植生を丁寧に観察することは、人間の記憶や記録から抜け落ちてしまった里山の暮らしの痕跡を読み取ることでもあることを実感した。また、川本氏や梶山氏の身体に蓄積された農業やものづくりの技術、動植物に関する知識の豊かさに触れ、それらを記録し、継承していくことの重要性を強く感じた。さらに、里山で生きるために培われてきた観察力、思考力、創造力は、現代の芸術実践とも深く通じるものであり、今後の制作活動にとって大きな示唆を得る機会となった。





フィールドワークを通してキャンパス周辺の 植生について学ぶ 応用実践編

日時 2025年10月9日（木）13:00-19:30

会場 広島市立大学

講師 山本愛子

前回の植生についてのフィールドワークの応用実践編として、現代美術家の山本愛子氏を講師に迎え、キャンパスに自生している植物を用いた草木染めのワークショップを開催した。

はじめに、山本氏から草木染めに用いられる植物の特徴や染色の手順について説明を受けた。その後、参加者で相談しながら、染料として使用する植物（葛、枇杷、ヨモギ、クロガネモチ、五倍子、銀杏、梅）を選定した。それらの植物を野外で採取し、適切な形や大きさに切り分け、染色液を抽出した後、布を染め、さらに媒染の工程を行った。

植物を採取し、手を使って染色の工程を進める中で、身近な植物が色を生み出す素材へと変化する過程を実感することができた。葉や枝そのものの色とは異なる色彩が布の上に現れ、さらにそれらの色が金属との反応によって多様に変化することに驚きと喜びを覚えると同時に、植物の持つ潜在的な性質に触れる機会となった。また、草木染めという行為を通して、身近な環境に存在する植物との新たな関係性を見出すことができた。古くから人間の営みの中で培われてきた染色の技術に触れることで、人間と植物との関わりの歴史を身体的に理解する貴重な経験となった。





植物・土・鉱物などの採集物を使って、 特殊印刷を行う

日時 2025年11月1日（土）- 3日（月）13:00-18:00

会場 広島市立大学

講師 吉田勝信

四回目の活動として、採集者、デザイナー、プリンターの吉田勝信氏を講師に迎え、植物や土、鉱物などの採集物を用いた特殊印刷のワークショップを開催した。

はじめに、自然を散策しながら素材を採集し、採集物からインクを作るという、吉田氏が展開している「Foraged Colors」の活動について話を伺い、インク制作の具体的な工程について説明を受けた。

その後、参加者がこれまでのフィールドワークやワークショップを通して採集してきた土や鉱物、植物、昆虫などの素材を持ち寄り、それぞれの素材をどのような形で作品へ展開するかを検討しながら、粉碎方法やインクの種類（油性、水性〔日本画、シルクスクリーン印刷〕、クレヨン）を決定し、制作を開始した。

3日間にわたり、素材を粉碎し、顔料を生成した後、植物油や膠、ミルクカゼイン、蜜蝋などと混合してインクを制作した。完成したインクは色ごとに並べられ、カラーホイールとして整理された。また、それぞれの顔料に素材の由来や採集された場所、そこから想起される背景をもとに名前を付ける作業も行った。

素材を細かく粉碎することで顔料を生成するという原初的な色の制作方法を経験する中で、すり鉢を通して手に伝わる触覚や素材をすりつぶす際の音に意識を向けることで、素材の性質を身体的に理解していく感覚があった。また、素材の色を発見し、名付ける行為は、私たちを取り巻く環境を新たな視点から解釈し、再構成する試みでもあった。さらに、創造性は制作者の内側にのみ存在するのではなく、素材との出会いと関わりの中で生じるものであるという吉田氏の制作に対する姿勢は、制作のあり方について新たな視点を与えるものであった。





Satoyama in Movement —ここに根をはり、共に生き、栄える— 初年度活動成果展『触』

日時 2026年2月6日（金）- 11日（水・祝）10:00-17:00
会場 広島市立大学内農空間予定地と現代表現ラボラトリー



今年度行ってきたさまざまな活動の帰結点として、Satoyama in Movement—ここに根をはり、共に生き、栄える—初年度活動成果展『触』を開催した。

展覧会は屋内外の隣接する二つの会場で構成された。屋内会場では、本プロジェクトのコーディネーターの堀口智尋が制作したインスタレーションが展示され、プロジェクトのコンセプト説明や今年度の活動記録、活動から派生した素材や関連資料などが紹介された。また、コーディネーターの立場から考察したアートマネジメントの構造的分析や、創造的活動を促進するための提案を示すダイアグラムやテキストも併せて展示された。



屋外会場としては、本プロジェクトの象徴的拠点であり、現在は空き地であるが、来年度以降は農空間へと変容していく予定の場所が使われ、参加者が今年度の活動を通して体得してきた知識や経験を基盤とし、それぞれの手法と素材を用いて制作した作品を展示した。土や粘土、植物などの素材から制作された作品は、雪や雨を含むさまざまな自然環境の中で、会期を通して野外に設置された。



本展覧会は、プログラム参加者にとってこの一年間に身体を通して学んできたことを自らの身体と素材を用いて作品として表現する機会となった。また来場者にとっては、屋内外の展示を巡ることでプロジェクトの全体像に触れ、一年間の活動の軌跡や、参加者の思考と実践が展開していく過程を追体験する契機となったと考えられる。さらに、来年度以降に農空間へと移行していくこの屋外空間にとっても、本展覧会はこれから始まる新たな営みと変容し続ける里山の未来への象徴的な節目として位置づけられるものであった。



Satoyama in Movement—ここに根をはり、 ともに生き、栄える—初年度活動成果展『触』 関連トークイベントと講評会

日時 2026年2月8日（日）12:00-17:00
会場 広島市立大学
講師 石倉敏明、石谷治寛、長坂有希

Satoyama in Movement—ここに根をはり、ともに生き、栄える—初年度活動成果展『触』の関連トークイベントとして、人類学者の石倉敏明氏を迎え、「『外臓』としての山と里—複数種の関係から考える—」と題した公開講演を開催した。

トークでは、石倉氏がこれまでアジア各地や東北地方で行ってきたフィールド調査の事例をもとに、神話や儀礼、舞踊などにおいて人間と人間ならざるもの（死者、精霊、動植物、自然物など）が交わる空間のあり方について話がなされた。また、複数種が相互に関係しながら存在する状態を示す「共異体」の概念や、生物の身体（内臓）と環境を連続した一体のものとして捉える「外臓」の概念についての解説が行われ、人間と環境との関係を新たな視点から捉えるための理論的枠組みが提示された。

他地域における慣習や実践の事例を知ることで、広島の風土や文化、本プロジェクトの活動と比較する視点が得られ、今後の活動をより多層的に展開していくための示唆を得る機会となった。また、複数の地域と連携しながら活動を進めていくことへの展望についても考える契機となった。

その後、石倉氏に加え、美学・芸術学を専門とする石谷治寛氏、アーティストであり本プロジェクト代表の長坂有希氏を講師に迎え、初年度活動成果展『触』の講評を行った。

講評会では、プロジェクトの趣旨と活動の経緯を時系列に沿って振り返りながら、参加者がこれまでに蓄積してきた経験や知識を共有した。また、展示作品について、制作者自身がコンセプトや素材、手法、制作過程で得られた気づきなどを説明し、それに対して講師および参加者が意見を交わした。

講評会を通して、これまでの活動や作品を客観的かつ体系的に捉え直す機会が生まれ、今後の活動や制作の方向性についてより多角的な視点を得ることができた。





Satoyama in Movement—ここに根をはり、共に生き、栄える—

長坂有希（プロジェクト代表／アーティスト・広島市立大学芸術学部講師）

約30年前、広島市の一部の山間部を切り開いて造られた広島市立大学のキャンパス。

ここにはもともと、棚田や雑木林が広がり、人が動物や植物、土や水など、異なる時間軸で生き、存在するものたちと歩調を合わせながら暮らす里山がありました。

しかし、さまざまな場所から大学に赴き、日々、研究や制作などの勉強や仕事に追われている私たちは、かつてここにあった里山や、今でもすぐそばで農業を営んでいる農家さん、または同じ時間や空間を共有している人間以外の生き物やものたちについて思いを巡らすことはほとんどありません。

そんな私たちは、まるで根をはらず水面を浮遊している浮き草のようです。

一時的だったとしても今いる場所と関わり、ここに根をはり、ここで暮らしてきた人々や人間を超えたものたちが持っている知恵を学び、さまざまな形での制作を実践し、それぞれの環世界を共有しながら生きる。

そんな内にも外にも開かれた、複数種が共生する学びの場、変容しつづける里山を作ることを目指して、アートプロジェクト『Satoyama in Movement—ここに根をはり、共に生き、栄える』を始動します。

知り、それらとの関係を築いていくことで、自分自身もこの土地や風景の一部となっていくことを願っていました。

今年度の活動を通して、すでにこの場所に存在している知恵に耳を傾け、注意深く観察することの重要性を強く実感しました。この地域で暮らしてきた農家の方々の語りや、過去の里山の記憶を内包する植生のあり方は、このプロジェクトが進むべき方向を示してくれるものでした。それらの知恵に学び、受け継いでいくことが、プロジェクトの独自性と強度を支えていくのだと感じています。

同時に、身体を動かし、人々や動植物、土や水に直接触れながら制作を行うことで、言語によっては得ることのできない身体的な学びと理解が蓄積されていくことも実感しました。素材と関わり、環境の中で制作する経験は、私たち自身の感覚や認識を変化させ、この場所との関係を新たに結び直す契機となりました。

このプロジェクトはまだ始まったばかりですが、今後このキャンパスにどのような里山が立ち上がり、変容していくのか、そしてこの活動を通して参加者や私自身がどのように変化していくのか、その過程を見つめていきたいと考えています。来年度以降も多くの方々と共に活動し、学び合う機会を持てることを願っています。

2025年6月、私たちは上記のプロジェクトステートメントを掲げて、『Satoyama in Movement—ここに根をはり、共に生き、栄える』(SiM)の活動を開始しました。

私自身は大学教員としてこの地に赴任し、外から来た人として広島での生活を始めました。日々の芸術実践を通して、この土地で暮らしてきた人々が守り、受け継いできた人間を超えた生き物や土地と共に生きるための知恵や技術に触れたいという思いが活動の根底にあったのだと思います。また、大学周辺の地形や地質、ここに生きる動植物について

創造的な学び合いの場を設えること

堀口智尋（プロジェクトコーディネーター／広島市立大学 芸術学部 デザイン工芸学科 現代表現分野4年）

私はこれまで、芸術的な行為が生まれる場や機会、状況をつくることに関心を持ち、表現の広がりや影響を与える要素や領域横断的な芸術実践の場を設えることについて探究してきました。いわゆるアートマネジメントと呼ばれる分野です。SiMでのコーディネーターとしての活動は私の研究のケーススタディでもありました。どんな要素が表現者たちに影響を与え、どんな状況が互いの専門性を高め合うのに必要なのか、領域横断的なアプローチをする中でどんなマネジメントが求められるのか。これらに関することを考えながらコーディネーター兼リサーチャーとして現場を観察してきました。

地理学を学んだプログラム1では扱う対象のスケールが大きいので、前もって知識を学んでおくことと、実物や現場を実際に見ることは解像度を上げるのに効果的だったように思います。また、プログラム2で学んだ植物をプログラム3で草木染めに用いた試みは、目にみえる形として植生のことを理解できるとともに昔の人々との生活と植物との関係性を感じられる実践でした。歩いて、触って、目にみえる形として理解する学びは、普段親しみのない分野や新しい世界を知るのには良い手法なのかもしれないと感じました。

プログラム4の頃には活動開始から時間も経ち、集団としての関係性が築き上げられてきたように感じました。この空間では受講者が講師役にまわっても、思いつきの挑戦やコラボをやってみても構わない。多様な専門が交わり、重なる、そんな学び合いの場なのだと側から見て思いました。

ルーツや関心が違う人々が集い、ある事柄に対してリサーチすることが前提かつ目的にある以上、どのように活動の場を設えていくか考えることは容易ではありませんでした。今まで触れてこなかった未知の世界を知るために歩み寄ろうとし、互いの知識や専門を引き出しながら協働していくアプローチの中では優位性などはなく、どちらかがもう一方を利用するような縦の関係になってはなりません。

SiMの活動目標の一つでもある複数種の共生というの、同じことが言えると思います。今回、SiMをきっかけに大学周辺に住まわっている地元の方々と関係を築くことができたのは、「この地域に根付きたい」というプロジェクトのコンセプトにおいてかなり大きなポイントだと思います。すぐに何かしらの成果に結びつくとは限りませんが、長い目で見て、大学（プロジェクト）と地元住民が交わることができたことに大きな可能性を感じました。

講師 Instructor

熊原 康博 KUMAHARA Yasuhiro

自然地理学／広島大学教授

1975年東京都生まれ。広島県在住。ヒマラヤや日本をフィールドとして、地形や地層の変形から活断層の活動史を復元する変動地形学が専門。身近な地域を対象に、地形と人々の暮らしの関係を読み解く活動も行う。主著に『Surface Ruptures Associated with the 2016 Kumamoto Earthquake Sequence in Southwest Japan』（Springer社）、『東広島地歴ウォーク』『西条地歴ウォーク』（共にレタープレス社）など。

吉田 晴彦 YOSHIDA Haruhiko

国際関係論、国際協力論、平和研究、分類学、生態学、分子生物学、フォトグラファー／広島市立大学国際学部教授

1965年大阪府生まれ。広島市在住。近年は野草、昆虫、野鳥など、私たちにとってごく身近な生き物たちがどのように世界と結びついているのか、それらがどのように現代世界を見る目を養うことにつながるのかという『身近な生き物と国際関係』（Amazon kindle）が研究テーマである。高精細な写真を撮影しながら、社会科学と自然科学とを結びつける視点を大切に研究している。

川本 誠 KAWAMOTO Makoto

農家

1934年広島県生まれ。広島市在住。広島市立大学がある大塚東で農家の長男として生まれ育ち、農家として暮らしている。農業の知識や技術以外にも石積みや井戸掘りなどの土木技術や、農具制作、動物や昆虫についても詳しく、地域の住民から長老的存在として敬われている。

梶山 健治 KAJIYAMA Kenji

農家

1958年広島県生まれ。広島市在住。農家の次男として生まれ育ち、一度は就職をしたが農地の相続がきっかけとなり、現在の大塚東に移り住み、農業を始めた。現在は野菜や果樹、花を畑で育てたり、ヤギやアヒルを家畜として飼ったりしながら、「農」を中心とした地域作りや大学生などの世代を越えた人たちとの交流に関心を持ちながら活動している。

山本 愛子 YAMAMOTO Aiko

美術家

1991年神奈川県生まれ。東京藝術大学大学院先端芸術表現科修了（2017）。ポーラ美術振興財団在外研修員として中国にて研修（2019）。自然環境と人間の関係性をテーマに、主に染色技術を用いた作品を制作。アジアを中心に国内外でフィールドリサーチや滞在制作を行い、土地に根ざした自然の記憶と人の営みが交差する痕跡や風景を可視化する。自然と人工、可視と不可視のあわいを探求し、染める行為を通じてその揺らぎを掬い上げることを試みる。

吉田 勝信 YOSHIDA Katsunobu

採集者・デザイナー・プリンター／吉勝制作所

山形県を拠点にフィールドワークやプロトタイプングを取り入れた制作を行なう。近年の事例に海や山から採集した素材で「色」をつくり、現代社会に実装することを目的とした開発研究「Foraged Colors」や超特殊印刷がある。趣味はキノコの採集および同定。

石倉 敏明 ISHIKURA Toshiaki

人類学者／秋田公立美術大学准教授

1974年東京都生まれ。アジアや日本各地でのフィールド調査をもとに、複数種をめぐる芸術人類学研究、アーティストとの共同制作、展示企画を行う。2019年、第58回ヴェネチア・ビエンナーレ国際芸術祭日本館展示「Cosmo-Eggs | 宇宙の卵」に参加。共著書に『Lexicon 現代人類学』『〈動物をえがく〉人類学 人はなぜ動物にひかれるのか』など。

石谷 治寛 ISHITANI Haruhiro

長坂 有希 NAGASAKA Aki

プロジェクト代表者紹介ページ（100P）に記載。

受講者

今田 順

宇都宮 朱里

浦川 千歌

吉川 永祐

木村 友美

近藤 有季

佐々木 こひな

波多江 真純

平岡 尚子

鞠川 春佳

美川 麻矢

レーティ フォン タオ

プロジェクト2

文化芸術と自然環境について地域から考え、 国際的な実践から学ぶ

Considering culture, the arts, and the natural environment locally, while learning from international practices

プロジェクト代表

石谷治寛（広島市立大学芸術学部准教授）

プロジェクトスタッフ

長坂有希（広島市立大学芸術学部講師）

石松紀子（広島市立大学芸術学部准教授）

古堅太郎（広島市立大学芸術学部准教授）

文化芸術と自然環境について地域から考え、 国際的な実践から学ぶ

T・J・デモス著『自然を脱植民地化する：現代アートとエコロジーの政治』の粗訳を基にした、公開オンライン勉強会を実施し、国際的なエコロジー芸術の理論と考えを学び、議論します。本書は、世界的なエコロジー危機の状況を分析したうえで、アジア、南米、EUなどのエコロジー活動を主体とした芸術の条項について理論的に論じる著作であり、受講生は、国際的な動向を理解したうえでローカルな実践に取り組み、それを国際的に発信する英語力や議論構成力の習得を目指します。

Based on a draft Japanese translation of T.J. Demos' *Decolonizing Nature: Contemporary Art and the Politics of Ecology*, we will hold a public online study session to learn about and discuss international ecological art theory and thought. The book examines the global ecological crisis and theoretical discussions of art centered on ecological movements across Asia, South America, the EU, and beyond. Participants will deepen their understanding of international trends, connect them to local contexts, and develop the English language and argumentative skills needed to communicate these practices globally.

2025年度プログラム

『脱植民地化する自然』を読む

- ①2025年10月9日（木）10:30-12:00 序章（担当：石松）
- ②2025年10月23日（木）10:00-11:30 序章（担当：石松）
- ③2025年11月6日（木）10:00-11:30 序章（担当：石松）
- ④2025年11月20日（木）10:00-11:30 第2章(担当：石谷)
- ⑤2025年12月4日（木）10:00-11:30 第2章、第3章（担当：石谷）
- ⑥2025年12月18日（木）10:00-11:30 第3章後半、第4章（担当：石谷）
- ⑦2026年1月22日（木）10:00-11:30 第6章（担当：長坂）
- ⑧2026年2月5日（木）10:00-11:30 第7章（担当：古堅）

会場 広島市立大学、オンライン（ハイブリッド開催）

講師 石谷治寛、長坂有希、石松紀子、古堅太郎

『自然を脱植民地化する』を読む

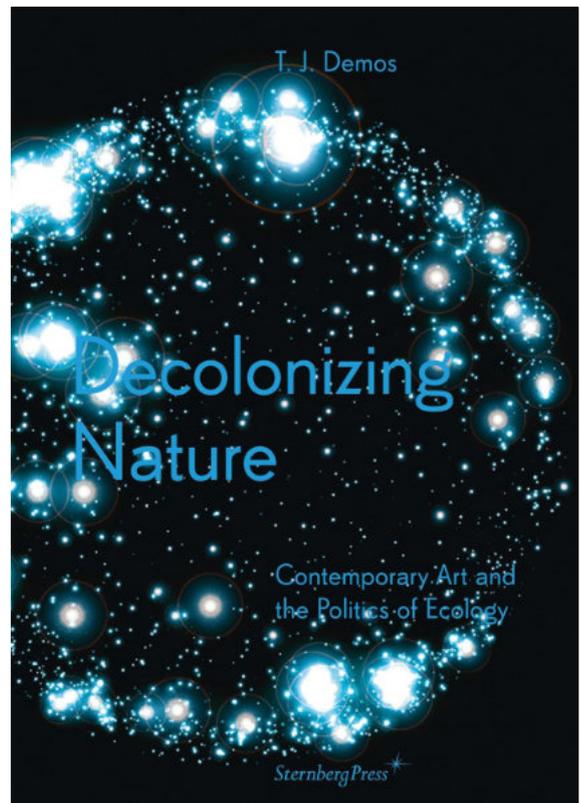
石谷治寛（広島市立大学芸術学部准教授）

企画の趣旨と読書会の位置づけ

本読書会は、T・J・デモス『自然を脱植民地化する』（2016年）を手がかりに、エコロジー危機をめぐる現代の政治状況と、それに応答する芸術実践の射程を、章ごとに確かめ直すことを目的として実施した。議論の焦点は、気候変動を「自然現象」や「環境意識の問題」としてではなく、資源開発・植民地主義・国境管理・安全保障・資本の循環といった制度的条件の束として捉え直す点にある。デモスは、こうした条件が特定の地域や人々に不均等に負荷を押し付ける構造を描き出しつつ、その構造に抗する実践がどのような形で芸術や美学、哲学の領域に現れ、あるいは芸術を通じて可視化されるかを問い直した。本研究会は、その問いの立て方自体を精密に追うための読書会であった。

ただし本会は、単なる内容理解や概念整理に留まらず、各参加者が抱える研究・教育・運営・地域実践の現場に引き寄せて読み直すこと、言い換えれば「この議論を、私たちの現場の言葉で引き受け直す」ことを重視した。読書会が国際的な正義の語彙を反復する場になってしまうと、参加者それぞれの現場の感覚や、制度の手触りが置き去りになる。そこで本会では、議論に同意できるか否かではなく、制度的言説や気候正義の語彙を丁寧に拾いながら、同時に「何が語られていないか」を浮かび上がらせる読解の道筋を探った。

丁寧に議論や語彙を拾った序章（石松）に続き、第2章～第4章（石谷）、第6章（長坂）、第7章（古堅）を中心に検討した。第1章と第5章は予定されていた日程の都合上扱う事を断念した。議論は、各回の担当者による発表と質疑応答を軸に進めつつ、訳語・参考文献・事例の背景確認を随時行う形式を取った。運営上の工夫として、毎回の読解負荷を下げるために、テキストの共有方法（OCR・翻訳・配布）を整えながら進めた。原文の精密な読解を理想として掲げることがはできるが、現実には各回の準備時間や参加者の負担に限界がある。そこで、翻訳や共有の仕組みを先に整備し、「読む環境」をつくること自体を読解の条件として扱った。翻訳の質を会の目的にするのではなく、章の論点が崩れない読み方を先に置き、重要箇所だけを確認し、細部の揺れは議論の中で調整するという運用へと徐々に変化した。



以下は読書会で議論の際にあがったウェブ・リンクである。本報告では、参照の詳細や図版掲載などは省くが、あわせて迎えることにより、読書会の射程の広がり共有したい。

クリエイティブ・エコロジー研究所 (Center for Creative Ecologies) <https://creativeecologies.ucsc.edu>

カリフォルニア大学サンタクルーズ校のアート・視覚文化史学科に設置された研究センターで、現代アート、政治、生態学の交差点を批判的かつ実践的に探究する拠点。T・J・デモスが所長を務め、気候危機、植民地主義、環境正義などのテーマを、展示、出版、レクチャーや共同プロジェクトを通じて扱い、オルタナティブなエコロジーの想像力と社会変革の可能性を追究している。

「自然の権利：アメリカ大陸のアートとエコロジー」 (Rights of Nature: Art and Ecology in the Americas) <https://www.nottinghamcontemporary.org>

2015年1月24日から3月15日までノッティンガム・コンテンポラリーで開催。T・J・デモス、アレックス・ファークハートソン、アイリーン・アリストイサバルによるキュレーションで、20人のアーティストが気候変動や自然との複雑な関係を探求。地球を搾取可能な資源と見なす考えに挑戦し、ポリビアやエクアドルでの自然の権利の法的承認を強調。アマゾンから北極までのアメリカ大陸を旅し、アート、先住民の視点、活動、哲学を結びつけて環境保護を訴えた。

アートアクティビズム

芸術表現を使って社会的・政治的な不正や権力構造を可視化し、議論や行動のきっかけをつくる実践。作品やパフォーマンス自体がデモやキャンペーンの一部となり、観客を「鑑賞者」から「当事者」に変えようとする点が特徴。グレゴリー・ショレット著『アクティビズムのアート／アートのアクティビズム - 抵抗する表現』の軌跡と行方 秋葉美知子訳、フィルムアート社、2025年。

たとえば、テート美術館内でBPの原油汚染を象徴する黒い液体をぶちまける《Licence To Spill》や、風車のブレードを運び込む《The Gift》、自身のCO₂排出を入れ墨する《Birthmark》があり、これらは美術館の美学を逆用して石油資本のイメージ洗淨を批判した。liberatetate.wordpress.com

進行役を担った石谷は発表者の発言に対して、短いコメントや注釈を加えることに注力した。それによって参加者が「どこに注意を置いて読めばよいか」「何を争点として残すべきか」をその都度確認していくゼミの進行法が繰り返された。注釈の基本形は、次の三つである。第一に、背景付与。章が応答している問題群や思想的系譜、事例の政治的条件を簡潔に置き、参加者が細部の情報量に押し流されないよう足場を作る。第二に、焦点固定。いまの章で争点となる概念（たとえば可視性、主体性、制度、権利、開発、移住など）を一点に絞って釘打ちし、議論が散漫になるのを防ぐ。第三に、参加者に返す。その争点を、各自の現場——教育、制度運営、地域実践、制作、研究——に引き寄せたときに何が見えるかを問い返し、主語をデモスから「私たち」へ移す。この三手は、理解の穴埋めではなく、問いを再配置するための操作として働いた。章ごとの精読を基盤としつつも、注釈を介して読みの主語を引き寄せ、制度の罅や不可視化を読み、ローカルな課題へ折り返す——この往復運動こそが、本読書会の方法であり、同時に成果でもあった。

序章の精読

本読書会の序章の精読は、いわば「この本をどう読むか」を決める「方法の章」として機能した。序章の精読は、内容理解だけでなく、以後の回で議論がほどけすぎないための心構えを作る作業として位置づけられた。

まずデモスの基本姿勢として確認されたのは、気候変動（環境危機）を「克服不可能な技術的問題」や「自然の障壁」としてではなく、第一に政治的危機として捉える、という立場である。終末論的な運命論を退け、制度と実装の意思さえあれば「まだ間に合う」という見取り図を、デモスは序章で明確に提示している。その際に鍵語として出てきたのが「大転換 (Great Transition)」であり、危機は恐怖の物語として消費されるべきではなく、「社会・政治・経済の再編成（体系的転換）」を駆動する動機になりうる、という認識が共有された。

さらに、デモスが「環境」問題を単独で語らず、民主主義の腐敗、公共交通、先住民の権利侵害、警察暴力、国境の軍事化などと接続しながら、相互連関する危機として扱う点も序章で強調されている。用語として「政治エコロジー (political ecology)」をデモスが用いて、彼の関心となる問題が束ねられている。また、企業メディア／娯楽産業が終末論を反復し、「環境破壊は避けられない」という感覚を作り出すこと、そしてそこから利益を得る構造（ナオミ・クラインによって論じられた災害便乗型資本主義の物語）への警戒も共有された。日本側の文脈として東日本大震災後の「復興」や再開発の経験が連想された。

このように危機が政治化されるとき、デモスは解決の創造的エネルギーの源泉を、国家や企業ではなく「市民社会の側（社会運動家／アーティスト／政治理論家／活動家）」に見出す。その活動は、美術制度の「壁の内側」だけでなく、「壁の外側」の公共空間や独立系メディア、共有財の回復領域へもまたがって展開することをイメージ複合体 (image complex) と呼び、序章で予告している。

読書会では、この見取り図が後の章（地域・先住民運動・国境・展示制度）を読むときの地図として使えることが確認された。

学術的方法論のジレンマへの問い

序章回で印象的だったのは、長坂が提示した「方法論の脱植民地化」の困難である。すなわち、先住民の知が必ずしも文献として残っていない／残さない場合、「アカデミックな参照文化（文献に依拠する規範）」の内部では、その知が「ないもの」に見えてしまう。では、どうやって参照し、語り、引き受ければよいのか。ここで長坂は、制作側の強みとして、体験や対峙、行動をベースにした知＝リサーチを、作品として提示できる点を挙げ、デモスがドキュメンタリー的・リサーチベースの実践を参照する理由を、制作の感覚から言語化した。また石松は学術的領域でも人類学的調査やリサーチの重要性を挙げた。

この問いに対して石谷が付け加えた応答の姿勢は、制度的な言説（参照・引用・論文形式）を拾いながら、同時に「語られていないこと」を可視化するという「読解技法としての第三の道」である。これはミシェル・フーコーがセクシュアリティ研究で行い、グレーバーとウェングロウが、規範的な言説から先住民の声を拾い、考古学的な痕跡から再現の想像力を働かせる方法がある。実際、石谷はこの困難を「理論家のジレンマ」として共有しつつ、デモスの方法論への共感と、自身も脱領域的に仕事をしているという立場性を明示した。

このやり取りによって、読書会の射程は「正しい引用の作法」へ回収されるのではなく、むしろ参照の欠落が生む沈黙や非対称性を、読む場でどう扱うかへと拡張した。以後の各章で繰り返し現れる「誰が語り得るのか／誰が語られないのか」という問題は、この序章回で、参加者の実感に根差した問いとして最初に立ち上がったと言える。

第2章 気候変動下の強制移住におけるイメージ複合体

第2章「強制移住の気候—モルディブから北極まで」は、気候危機が「強制移住」として現れる局面を扱い、視覚文化がその状況をどう可視化し、どう政治化しうるかを問う章である。ここで重要なのは、移住がしばしば「気候が変わったから人々が移動する」という自然因果の物語に回収されやすい点だ。その語り方では、責任の所在が消え、当事者が「可哀想な被害者」として固定されやすい。デモスはその回収を避け、移住を政治の結果として捉え直す。資源開発、国境管理、軍事化、警察的統治、経済格差——それらが複合して生活基盤を崩し、移動を強制する。

研究会で繰り返し確認されたのは、「イメージが何をするか」を問う必要である。

リンク先の記事(<https://independent.org/2014/09/greening-our-desires/>)は、気候危機への運動が「恐怖（終末イメージ）」ではなく、「欲望や自由を解放するユートピア的なビジョン」を提示する必要があると論じている。グリーン・アクティビズムとアートアクティビズムは、環境負荷を減らすことを「摂生」ではなく、創造性や身体解放、コミュニティの喜びと結びつけて想像しなおすことで、人々が進んで参加したくなる未来像をつくり出そうとしている。

災害便乗型資本主義

ナオミ・クラインは、災害や危機の「ショック」を利用して、新自由主義的改革（民営化・規制緩和・福祉削減）を一気に押し通す権力と資本のメカニズムを構造的・グローバルな視野から批判的に描いた。クライン『ショック・ドクトリン——惨事便乗型資本主義の正体を暴く——上・下』幾島幸子・村上由見子訳、岩波書店、2011年。

レベッカ・ソルニットは、同じ災害状況のなかで人びとが自発的協力や連帯を生み出す「災害ユートピア」に注目し、市場や国家ではなく市民のケアと共同性の潜在力を丹念に描き出した。ソルニット『災害ユートピア——なぜそのとき特別な共同体が立ち上がるのか』高月園子訳、亜紀書房、2010年。

制度的な言説を通した、「語られていないこと」の可視化

ミシェル・フーコー『性の歴史I 知への意志』渡辺守章訳、新潮社、2019年。デヴィッド・グレーバー、デヴィッド・ウェングロウ『万物の黎明——人類史を根本からくつがえす』酒井隆史訳、光文社、2023年

アルゴス・コレクティブ (Collectif ARGOS) collectifargos.com

フランスを拠点とする9人の受賞歴あるジャーナリスト、グラントレポーター、フォトジャーナリストのグループ。主に環境問題への啓発キャンペーンで知られ、気候変動難民、生態系フットプリント、海洋汚染などのドキュメンタリーシリーズを展開。COP15、COP21、IUCN総会などで大型展示や書籍、メディア放送を行い、持続可能な開発課題に取り組んでいる。

Contingent Movements Archive (偶発的運動アーカイブ)

contingentmovementsarchive.com

モルディブの将来を思弁的に扱ったオンラインアーカイブ。海面上昇による同国没入を予測し、移民パターン、文化継承、国際法の課題を探求。2013年のヴェネチア・ビエンナーレのモルディブパビリオン関連プロジェクトとして構築された。ハンナ・フスベルグとローラ・マクレーンが共同で主導。

Tsunami Architecture christophdraeger.com/projects/video/tsunami-architecture

クリストフ・ドレーガーとハイドルン・ホルツファインドによる2012年のアートプロジェクト。2004年のインド洋津波後の復興建築を調査し、タイ、インドネシア、スリランカ、モルディブ、インドの被災地を3ヶ月間訪れ、被災者や支援者へのインタビュー、映像を通じて、援助資金の影響、地域社会の変化、建築の適応過程を探求した。

スパンカル・バナルジー subhankarbanerjee.org

インド系アメリカ人の写真家・環境活動家で、北極圏の生態系や先住民の生活を捉えた作品で知られる。彼の写真は、移住や環境破壊を単なる悲劇としてではなく、制度的な統治や政策の影響を浮き彫りにする技法を用いる。「Arctic National Wildlife Refuge(2002)」は、アラスカの北極圏保護区を撮影し、ガンナウ (Gwich'in) やイヌピアット (Inupiat) 族の生活、野生動物の回遊を描いた。このシリーズは、石油開発の脅威を制度的に示し、哀悼を超えた政治的・生態学的視点を強調。Bush政権下で議会に影響を与えた。

リーセ・オートジェナとジョシュア・ポートウェイ「ブラック・ショールズ株式市場ブラネタリウム (Black Shoals)」

アーティストのリーセ・オートジェナとジョシュア・ポートウェイによる作品で、展示のたびにアップデートされる。2015年12月3日から2016年3月20日までロンドンのサマーセット・ハウスで開催された「Big Bang Data」展のためにも再制作された (<https://www.youtube.com/watch?v=GRJ-u7KkkA>)。このインスタレーションはブラネタリウム形式で、世界中の株式市場のリアルタイム取引データを星空として視覚化し、各企業を星として輝かせ、取引量に応じて明滅させる。星の光をエネルギー源とする人工生命の生態系も共存し、金融市場の複雑な動きを銀河や星雲のように表現することで、データの力学を探求している。1973年にシカゴ大学のフィッシャー・ブラックとマイロン・ショールズ教授によって開発されたブラック・ショールズ・オプション価格決定式をタイトルにしている。

1973年現代アートオークションの興隆

1973年にScul Auctionによって現代アートのオークションが本格化。『アートのお値段』という現代のオークション市場の高まりを扱った映画で、取り上げられている。
参考リンク。 <https://www.suiha.co.jp/column/thebegining-of-commercialization-of-art/>

写真や映像が、破局のスペクタクルを作ってしまうと、見る側の同情や恐怖に回収され、当事者は「語られる対象」に留まる。この理由からアルゴス・コレクティブによるモルディブの写真は、批判的に言及され、それに対して大統領の水中パフォーマンスの意義が強調される。

しかし同じイメージでも、当事者の政治的主体性（要求、交渉、組織化、連帯）を見える形で提示するならば、危機は「遠い場所の悲劇」ではなく「いまの政治の選択」として立ち上がる。環境活動家・写真家としてバーナジーは、移住を単なる哀悼の対象にせず、制度と統治の輪郭を浮かび上がらせる技法が論点として共有された。

環境危機をめぐる視覚文化が、何を可視化し、何を不可視化するのか、そしてその可視化がどのような政治的働きを持つのが主題となった。ここで議論が深まったのは、イメージを「告発の道具」や「啓発のメッセージ」として単純化せず、イメージが成立する配置——キャプション、展示、流通回路、受け手の前提——を含む複合体として捉える視点が共有された点である。石谷はこの章の要点を「イメージ複合体」として押さえ、作品単体の意味よりも、それが置かれる制度的条件（美術館、メディア、教育、運動）を含めて読む必要を確認した。

第3章 「ポスト自然の条件」：自然の金融化と、対抗実践としての生活技術やパーマカルチャー

第3章「ポスト自然の条件—自然の後の芸術？」は、自然が市場の論理に回収され、金融化されていく過程を押さえつつ、それに抗する芸術実践を検討する章である。ここでの焦点は、危機が「リスク」として計量され、管理可能な対象へ置き換えられるとき、政治的責任や歴史的暴力が見えにくくなる、という点にある。研究会で確認されたのは、自然の金融化が単に「金儲けの問題」ではなく、危機の語りそのものを変形させるということだ。危機が数値化されれば、誰が壊し、誰が負担するのかという問いは、技術的管理や投資の話へ流れていく。そうすると植民地主義の連続（資源の収奪、土地の奪取、労働の不均等）が、背景へ押しやられてしまう。この章を読んで見えてくるのは、自然の金融化が、環境の脱政治化と表裏一体である、という構造だ。

本書の冒頭では、リーセ・オートゲナとジョシュア・ポートウェイ《ブラック・ショールズ株式市場ブラネタリウム》が具体的な作品描写とともに説明される。さらに名前が挙がったのが、エイミー・バルキンのプロジェクトである。ここでは、資本主義的な取引の論理で環境問題を「解決」しようとする枠組みそのものが問われ、バルキンの実践が、その限界や矛盾を可視化する例として参照された。また、制度批判の歴史線上の参照点としてハンス・ハーケも欠かせない。70年代以降の制度批判が、現代のエコ・アクティビズムとどう接続しうかが

議論された。さらに、アクティビスト寄りの実践例としてグリーンフォートの試みが、シャルジャ・ピエンナーレでの展示を含む制度的な矛盾も含めて言及される。環境議題が国際展で扱われるとき、政治性がどこで濃くなり、どこで薄まるのか、という視点が補助線として加えられた。加えて、メディア介入と社会風刺の手法としてイエス・マンが参照され、作品が美しく完結するよりも、社会の回路へどう割り込むかが、危機の語りを変える可能性がある、という話も出た。

環境が金融化される回路——炭素取引、オフセット、グリーンな開発の名のもとで進む収奪に対する批判に加えて、対抗実践を「ユートピア」の語彙で捉え直す点である。ここでのユートピアは、非現実的な理想ではなく、生活技術・共同体設計・共有財の再構築として具体化される。ラボフィヤニルス・ノーマンのようなガーデニングやパーマカルチャーの実践は、自然回帰のノスタルジーではなく、資本主義的な生産・消費の回路を別様に組み替える実践として立ち上がる。ハーグのストルムのように公共彫刻などを支える機関が、記録（アーカイブ）と場（コミュニティスペース）を備えている事例も話題になり、芸術実践を作品の完成度よりも、どこに拠点を置き、どう継続するかとして考える方向が見えた。また、広島でのアグロフォレストリーを含む地域実践が参加者から言及されたが、日本の地域実践（たとえば農や林業、過疎地の生活、教育現場）を想起させられた。章の論点は「自分の場所でどう実装可能か」という問いへと折り返される。ここでは、理論的な批判を積み上げるだけでなく、別の生活の組み立て直しができるか、という問いが前景化した。

第4章 メキシコの多国籍企業による開発批判から先住民運動の歴史を掘り起こす地域美術館の実践まで

第4章「もう、たくさんだ! —メキシコの芸術と革命のエコロジー」では、メキシコの政治的条件と芸術実践の関係が、抽象的な「抵抗の美学」ではなく、具体的な歴史条件（開発、暴力、国家、先住民運動、国境）と結びつけて検討された。読書会では、サパティスタ（サパティスタ民族解放軍）への言及が、運動と芸術の接続点として繰り返し参照され、抵抗の語彙が単なる道徳的正しさに回収されないよう注意が払われた。石油の海上流出事故やデルモンテの植民地主義を暴露しながら、そのブランド・イメージを流用するミネルヴァ・クエバスの戦略はパラサイト・アプロプリエーションとして位置付けられる。また、ペドロ・レイエスの名も参照され、都市制度・コミュニティ・暴力・教育といった複数の層が絡む地点で、芸術が担う役割が問い直された。

サパティスタ民族解放軍による経済成長の論理に巻き込まれない共同体運営は、抽象的な処方ではなく、すでに存在する生存モデルでもある。また、自由の学校、集会、別様の選挙運動といった制度外部の政治技法が整理され、環境政治が

オイヴィント・ファールシュトレーム Garden (1973年)
<https://www.fahlstrom.com/installations/garden-world-model>
 ファールシュトレームもグローバル経済の図式化を1970年代に行っていて、World Map, World Bankという作品で、ニクソン・ショックに対応する同時代の市場経済や国際銀行の変化にいち早く対応した作品を発表した。

炭素量取引とオフセット

炭素量取引（排出量取引）は、政府が企業にCO2排出枠を設定し、余剰枠を市場で売買する義務的な制度。一方、オフセットは自社排出を削減努力後、他者の削減実績（クレジット）を自主的に購入して相殺する仕組み。

エイミー・バルキン「Public Smog(2004-ongoing)」

amybalkin.com/work-1/publicsmog

大気そのものを「公共の公園」に見立てるプロジェクトで、空気中の一部を人間の活動から守ろうとする試み。排出権の購入や国家の世界遺産登録申請などを通して、空気や大気が誰のものなのか、気候変動と公共性を問い直す。

トゥーエ・グリーンフォート「Exceeding 2 Degrees」

tuegreenfort.com/exceeding2-degrees

シャルジャ美術館内の気候は空調システムによって制御されている。期間中、博物館全体の温度を2°C上げることで、エネルギー消費が削減される。電気代で節約された金額の概算を用いて、エクアドルの熱帯雨林地域が環境団体ネベンテスを通じて購入された。

Labofii (Laboratory of Insurrectionary Imagination) labo.zone

2004年にロンドンのスクワットで始まったアートとアクティビズムの集団。芸術家と活動家が協力し、創造的な直接行動をデザイン・実行する。例えば、コペンハーゲン気候サミットでの自転車デモなど、喜びと政治的効果を兼ね備えた実験的なプロジェクトで知られる。現在はフランスのノートルダム・デ・ランド地区（ZAD）に拠点を置き、水平的な組織化と芸術を通じた抵抗文化を推進している。

ニルス・ノーマン「Eetbaar Park」(2009-)

オランダ・ハーグのストルーム (stroom.nl) が委嘱した、パーマカルチャーを用いた都市農園／公共空間プロジェクト。2009年から継続する取り組みで、市内の公園やシティファームの一角に、果樹や食べられる植物、ハーブなどを組み合わせた「食べられる庭」をつくり、市民が学びながら参加できる場になった。持続可能な都市デザイン、コミュニティづくり、ボトムアップのまちづくりといったテーマを、美術と農のあいだの実験として具体化した。

ミネルヴァ・クエバス minervacuevas.org

メキシコ出身の現代アーティスト。多国籍企業の広告やロゴを借用し、政治・経済・社会システムの不条理を批判する作品を制作。ビデオ、彫刻、パフォーマンスなど多様なメディアを使う。

ペドロ・レイエス「銃をシャベルへ」(2008) pedroreyes.net

回収した銃をシャベルに変え、樹木を植樹させることで、破壊を創造に転換した。レイエスは、暴力の解消やコミュニティの再構築をテーマに、参加型のアプローチを取り、ワークショップ形式で観客を巻き込み、対話や省察を促す。

サパティスタ民族解放軍 (EZLN) enlacezapatista.ezln.org.mx

メキシコのチアパス州を拠点とする先住民主体のゲリラ組織。主にマヤ系農民が中心で、1994年のNAFTA発効に反対して武装蜂起し、新自由主義政策や先住民差別への抵抗を掲げている。非暴力的な自治運営を続け、教育・医療・農業の自給自足システムを維持し、女性参加や環境保護を重視した民主的实践を行っている。宣言集は邦訳された。サパティスタ民族解放軍『もう、たくさんだ！メキシコ先住民蜂起の記録1』太田昌国・小林致広訳、現代企画室、1995年。

柿手春三による海田湾埋め立て反対運動

柿手春三 (1909-1993) は広島県三次市三良坂町にゆかりのある洋画家で、戦後は反戦・反核を主題とする制作と平和運動に携わり、1955年には四国五郎・下村仁一・増田勉らとともに「広島平和美術展」を創設した。三良坂平和美術館は現在も柿手の作品を常設の中心に据えている。柿手春三は反対運動に立ち上がり、住民・平和団体とともに長期の取り組みを展開した。住民側の主な争点には、海域の自然環境の破壊や、周辺の米軍・自衛隊関連施設との関係拡大への懸念などがあり、広域的な市民運動として継続された。

「学びの形式」と不可分であることが確認された。さらに、音楽・演説・パレードなどの祝祭性が、政治を制度に還元せず、身体集合として立ち上げる契機になる点も議論された。祝祭は雰囲気ではなく、連帯を生成する技法である、というデモスの理解である。この回では、現代アートの側からの具体例としてSUPERFLEXの名も挙がり、政治的テーマが作品形態を越えて、資源・公共性・共同性の設計に触れてくる感触も共有された。

第4章を通して、作品を単体で語るよりも、一方で開発や植民地主義の歴史があり、他方で、それに抵抗する地域実践のアーカイブやコミュニティスペースを含む「拠点」として地方美術館を捉える論点もあった。こうした議論は北米・中南米の問題に閉じるのではなく、地方の制度へ引き戻すことで、読書会全体の射程をさらに広げた章であった。

ローカルからグローバルな実践へ

第2章-第4章を通読して本研究会が得た重要な見取り図は、次の三点にまとめられる。第一に、気候危機は「自然の変化」ではなく、「移住」「金融化」「開発」といった制度によって配置される不均等として現れる。第二に、その不均等を可視化する表象は、当事者を客体化しうるため、政治的主体性(権利、組織化、教育)をどう立ち上げるかが焦点になる。第三に、芸術実践は制度の内外を往復しつつ、公共空間・共有財・拠点形成(場づくり)へ接続しうるが、同時に美学へ回収される危険も孕む。

続く、第6章と第7章では、特定の地域の分析よりも、アーティストの集会的な取り組みや国際展による、グローバルなエコロジー危機への対応が話題となっている。第6章は自然をめぐる権利・主権の語彙をどう組み替えるか、第7章は、国際芸術祭のような巨大制度は、その組み替えを支えうるのか、それとも無害化してしまうのか、という問いをローカルな実践からグローバルなスケールへと広げて考察している。

第6章 多国籍の芸術家集団による自然の脱植民地化、そして「自然の権利」の国際的な高まり

第6章「自然の脱植民地化—世界を変える」では、グローバル・ノース／サウス、国家／先住民、開発／搾取といった対立軸が、単なる二項対立としてではなく、環境政治の制度設計や権利概念の再編として論じられた。デモスが強調するのは、「自然」が単数の普遍概念として語られるとき、その語りしがしばしば支配の装置になってしまうことである。自然は、資源として計量され、所有され、切り分けられ、交換される。その過程で、土地・労働・生命の関係が「管理可能な対象」へ変換され、植民地主義的な収奪の回路が更新されていく。だから

「自然の脱植民地化」は、自然観の更新に留まらず、権利・主権・法制度といった政治の中核語彙の再配線を含む。そこで強調されるのが、「自然の権利」やエージェンシーや主権をめぐる近年の議論である。

研究会で共有された理解は、「自然の権利 (Rights of Nature)」や「自然の主権」という語彙は、自然を「弱者として保護する対象」にするための言葉ではなく、そもそも政治共同体の境界を組み替えるための言葉だ、という点だった。人間中心的な主権の枠組みの中では、自然は常に外部になる。そこで必要になるのは、自然を共同体の内部へ入れるような制度的想像力である。

この点で参照されたのが、ミシェル・セールの『自然契約』である。社会契約が人間同士の合意を前提にしたとすれば、自然契約は「人間の外部」を契約の内部へ入れる発想であり、政治の境界線を引き直す提案として理解された。研究会では、この参照が、倫理を語る段階から法や制度を組み替える段階へ、議論の重心を移す助けになっていたと思う。

この章の具体的な参照点として、リサーチと可視化の実践を組み合わせるワールド・オブ・マターが挙げられた。研究会では、こうした実践が「作品を見せる」こと以上に、資源・物流・排出・土地利用の回路を資料化し、政治の輪郭を作り直す力を持つ点が重要だと確認された。また、非人間のエージェンシー（人間以外も行為主体として扱う視点）をめぐってブルーノ・ラトゥールへの言及もあり、理論としては魅力的だが、それをどのように法・制度・現場の判断へ接続するかが課題になる、という感触も共有された。

加えて、自然の権利が理念ではなく「衝突の現場」であることを示す例として、エクアドルやチェロキーといった固有の文脈が触れられた。ここで得られた確認は、自然の権利を語るとは、自然をめぐる「決定権」と「責任」の配置を変えることである。本章の最後には、ワールド・オブ・マターが、自然をめぐる国際的な衝突や交渉を動的な世界地図として視覚化するウェブ・プロジェクトについて確認した。補足として、自然の権利の歴史を地図化する、環境法学モニターのサイトも合わせて言及された。

研究会でも、「広島という場所の問い」を抱えたまま読むことが、この章の理解を支えていた。つまり、自然の権利という語彙は、国際ニュースの話ではなく、自治体・大学・企業・地域コミュニティが、何を「共有可能なもの」とみなして扱うか、という現場の制度論に触れてくる。

この回の進行のなかで、AIや研究倫理、大学制度の話題にも触れられた。エージェンシーという言葉は代理と主体性の二つの訳語をもつ。デモスはエージェンシーとしての複数種の自然に対する人間による「応答責任」や「主体性の引き受け」を強調するが、これは環境政治だけでなく知の制度にも連動するのではないかという意見が出た。特に、AIが発話主体のように振る舞い、責任の所在が曖昧になりやすい状況は、環境問題における「責任の分配」の困難とも共鳴する。

ミシェル・セール『自然契約』（1990）

従来の社会契約論を拡張し、人間と自然の間に新たな契約を提案した。ルソーらの社会契約に対し、自然を能動的な主体として位置づけ、環境破壊を防ぐ共生の枠組みを提唱している。『自然契約』及川馥、米山親能訳、法政大学出版、1994年。

ラトゥール「アクター・ネットワーク・セオリー (ANT)」

人間だけでなくモノや自然も「アクター」として扱い、それらが「翻訳」や「移送」を通じて動的に結びつくネットワークで社会を説明する理論。生物や機械などの非人間もエージェンシーとして機能し、常に変容する関係性の連鎖として捉えられる。

ワールド・オブ・マター worldofmatter.net

資源の採取・流通をめぐる地球規模の生態系をテーマにしたマルチメディア・プロジェクト。オープンアクセスのアーカイブとして、芸術、研究、映像などを通じて環境問題や資源の不均衡を探求している。

The More-Than-Human Life(MOTH) mothlife.org

ニューヨーク大学の法学者を中心に、地球上の生命を保護するための法律を創造し、変革するためのプロジェクトを制作している。

自然の権利

2008年にエクアドルは自然の権利を世界で初めて憲法に明記し、2011年にはビルカバンパ川の権利侵害したとして、川が勝訴。コロンビアの「アトラト川判決 (Atrato River Decision)」(2016年)は川とその流域の生態系と先住民コミュニティ全体を「権利の主体」と認めて、国、自治体、コミュニティに「保護の義務」と金採掘や水銀汚染の原因を阻止し、生態系を回復させるための「行動計画の策定」を命じた。それ以降「自然の権利」を認めた判例として参照され、ムテシカウシブ、カササギ川（カナダ、2021年）、マル・メノール法（スペイン、2022年）など北米・南米・欧州で、自然保護に先住民の役割を認め、実効力をもたせる法律が成立している。環境法学モニターは、世界中での事例を地図情報化した。ecojurisprudence.org

ドクメンタ13 documenta.de

ドクメンタ13は、2012年にドイツのカッセルで開催された現代美術の国際展。ドクメンタは、5年に1度開催され、第13回目は、キャロリン・クリストフ＝バカールギエフがディレクターを務めた。

遺伝子組み換えをめぐるバンダナ・シヴァとダナ・ハラウェイの立場の相違

モンサントのような企業が推進する遺伝子組換え作物に対し、種子の特許独占や生物多様性の破壊、農民の依存強制といった原則的な批判を展開している。シヴァは緑の革命やバイオテクノロジーを「生態的暴力」と呼び、モンサントのラウンドアップ耐性種子が毎年種子購入を強いる仕組みを非難する。これにより伝統的な種子共有が崩壊し、単一栽培が土壌劣化や水資源枯渇を招くと指摘。バンダナ・シヴァ『バイオパイラシー グローバル化による生命と文化の略奪』松本文二訳、緑風出版、2002年。他方で、ダナ・ハラウェイは、サイボーグ・フェミニズムを提唱し、犬を伴侶種と呼び、人との共在関係を理論化した。遺伝子組み換え食品についての共感については以下で論じられている。ジョージ・マイヤソン『ダナ・ハラウェイと遺伝子組み換え食品』須藤彩子訳、岩波書店、2004年。

クレア・ペンテコスト Soil-erg (2012)

シカゴ芸術大学の写真学科教授で、環境運動家としても知られる。彼女の作品「Soil-erg」（土壌エルゴ）は、種子をテーマにしたセクションで展示され、土壌や農業、環境問題をめぐるインスタレーション。土壌を「erg」（仕事やエネルギーの単位）と見なし、人間と自然のつながりを問いかけ、土壌の生態系や食糧危機、遺伝子組み換え作物への批判を表現した。

オトリス・グループ「ラディアント」(2012) otolithgroup.org/work/the-radiant

オトリス・グループは、イギリス・ロンドンを拠点とするアーティスト・コレクティブで、「ラディアント (The Radiant)」は、福島第一原発事故を題材にした映像作品。震災報道映像やチェルノブイリ記録をモニタージュで組み合わせ、放射線の「目に見えない風景」を描き、広島のアートギャラリーミヤウチなどで初公開された。

第7章 ドクメンタ13が提示する環境芸術の多様性の矛盾

第7章「世の終末に対するガーデニングドクメンタ13の事例」は、終末論的なイメージの反復がもたらす無力感や運命化への批判を踏まえつつ、国際芸術祭の実践がいかに環境政治と交差しうるかを検討した章である。ここで扱われるドクメンタ13は、環境に配慮するレトリックを掲げながらも、巨大な物流・移動・制度運営を伴うという矛盾を抱える。読書会では、この矛盾を「偽善」として断罪するのでも、「それでも意味がある」と擁護するのでもなく、矛盾の露呈そのものを出発点にして、制度の作動を読み、そこから別の実装可能性を探る、という態度が共有された。

国際展は「多様性」を掲げやすい。しかし、多様性の展示が対立の可視化に届かないなら、それは「対立のない自然」という危険な像を作ってしまう。研究会では、この論点が、国際展批判に留まらず、地方で場をつくるときにも、そのまま跳ね返ってくる問いとして共有された。場には必ず利害がある。行政、企業、大学、地域住民、作家、観客、それぞれの条件が異なる。

この章の背景として、ドクメンタ13の芸術監督であるキャロリン・クリストフ＝バカルギエフの態度が話題になった。開かれた場を作ろうとする意志も読み取れるが、同時に、その開かれ方が、政治経済的対立の輪郭をぼかしてしまう危険もある。具体的な作品例として、都市での自給的食料生産の模型としてクレア・ペンテコストの垂直プランターが言及され、「実践模型」が展示空間でどのように読まれるかが話題になった。こうした模型が、社会へ接続する回路を持てば政治性になる一方、展示の内部で完結すると「飾り」にも見えてしまう、という危うさが確認された。また、生態系や昆虫をめぐる作品例としてクリスティーナ・ブッフによる期間中にわたって行われた蝶を放つパフォーマンス作品も紹介されている。このドクメンタに訪問した石谷や古堅にとっても、これらの芸術実践が、公園の自然環境に溶け込んでいたために作品のインパクトや印象の薄い作品だったという印象や記憶が振り返られた。

さらに理論的背景としてダナ・ハラウェイが参照され、マルチスピーシーズ／ポストヒューマンの視点が展覧会の気分を支えていたことが確認された。一方で、モンサントのような遺伝子組換え作物についてバンダナ・シヴァは原則的な批判を行うが、ともするとハラウェイのポストヒューマン論は、科学による生物の改変を肯定する生命観が現状肯定に脱する危うさも指摘されている。研究会では、こうした「強い対立」を、展覧会制度がどこまで引き受けられるのか、という問いが残った。

デモスが結論として評価するのは福島第一原発事故による住民の移住を、東日本大震災直後の取材によってまとめたオトリス・グループの映像作品である。2012年に開催されたドクメンタ13は、2008年以降に高まったウォール街占拠運動や、2011年の東日本大震災の余波が、国際展の主題と結びついていた事が思い出された。

本書が出版されてからすでに10年が経過しているが、本書を読むことは、この数十年に亘る環境芸術が国際的な芸術界の主要なテーマとして広がる、変化の一端を振り返ることにもつながるだろう。

第6章では、自然の脱植民地化を、権利・主権・法制度の語彙へ接続し、政治の境界を組み替えることが提案された。第7章では、その提案が国際芸術祭の制度の中で、政治性にもなれば無害化にもなるという二面性が示された。

この二章を通して本研究会が得たのは、ローカルな実践をグローバルな形成の中に位置づけ直す視点と同時に、制度がその視点をどこまで引き受けられるか（対立を消さず、責任を曖昧にしない設計を持てるか）という争点だった。

総括：本読書会が獲得した射程

本読書会の成果を一言で言えば、デモスの議論を「理解する」だけでなく、それを用いて「私たちの読み方を更新する」ことができた点にある。気候危機や植民地主義批判をめぐる言説は、国際的な正義の語彙として流通しやすい。しかし本読書会は、エコロジー危機をめぐる現代芸術の議論を、啓発や正義のスローガンに回収せず、制度・主体・可視性の襲として読み直し、なおかつそれを地方の現場（教育・運営・場づくり）へ折り返すための技法を共同で鍛えた試みだったと言える。デモスの議論は、そのための「答え」というより、「問いの再配置」を促す装置として働いた。ここで得られた読解の型は、今後の研究・教育・地域実践においても、蓄積されるはずである。

なお、本研究会は、マイクロソフトTeamsを用いたオンラインで行われた。本報告文の執筆にあたって、記録動画から生成されたトランスクリプションを、ChatGPT5.2で分析し、骨格となる草稿として出力した。その草稿のハルシネーションに注意しながら、全体的に改稿したのが、本報告文となる。

さらに、用語集やリンクは、AI検索ツールPerplexityを使用した結果を参考に修正を加えた。それらをCopilotで再検証している。それでも予測推論モデルによるハルシネーションの可能性は原理的にゼロとはならないため、著者・編集者による校正チェックを行なっている。

本報告の文責は、著者および、編集チームにある。



講師 Instructor

古堅 太郎 FURUKATA Taro

現代美術家／広島市立大学芸術学部准教授

1975年、広島生まれ。2001年、広島市立大学大学院芸術学研究科修了。2004年に渡独。2008年、ドイツにてポーラ美術振興財団在外研修員。2010年、ベルリン・ヴァイセンゼー美術大学大学院彫刻科修了。2017年より広島を拠点に活動。自分自身のルーツや場所に固有の歴史をリサーチしながら、共同体の中で変化していくアイデンティティをテーマとしている。近年は、戦後日本のアイデンティティ形成に果たした広島の役割に注目しながら制作を行っている。

石松 紀子 ISHIMATSU Noriko

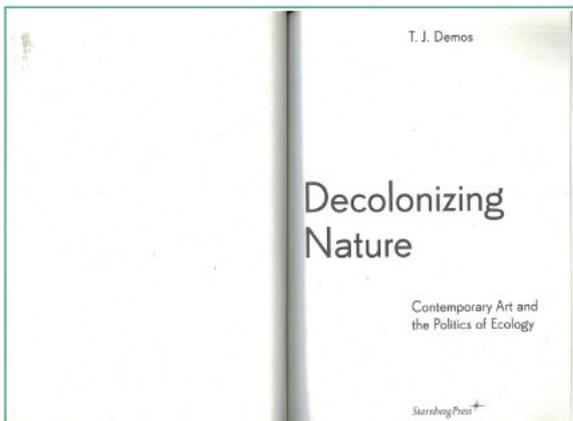
広島市立大学芸術学部准教授

英国のブラック・アートや東南アジアの戦後美術など、脱植民地化やポストコロニアルな視点から現代美術を考察している。また、広島市の基町地区でアートプロジェクト「基の町」を実施するなど、地域と現代美術の関係を考えるプロジェクトにも取り組む。

石谷 治寛 ISHITANI Haruhiro

長坂 有希 NAGASAKA Aki

プロジェクト代表者紹介ページ（100P）に記載。



プロジェクト 3

空き家の解体と合体。 枠組みから外れた余剰分を、 再び生活圏へ呼び戻す

Dismantling and recombining vacant houses—reclaiming surplus spaces beyond existing frameworks and returning them to everyday life

プロジェクト代表

福田恵 (Yellow River College)

プロジェクトスタッフ

内野康平、内野いずみ、近藤有季、藤井宏水、本間美穂子 (Yellow River College)

空き家の解体と合体。 枠組みから外れた余剰分を、 再び生活圏へ呼び戻す

安芸高田市吉田町にある民家の立ち退き・家屋解体で生じた資材を、甲田町にある拠点へと運び、再利用し、循環を通した場所づくりを受講生とともに学び、実践します。取り壊し前の建材を確認し、家屋の解体やその活用方法を考えながら、過疎地域の文化拠点として活用できるように土間を施工します。また、本活動で生じる様々な有機資源が分解されるシステムを構築し、資源循環や、暮らしと創作行為、人と自然のかかわりについての思考を深めます。

We will transport materials generated through the vacating and dismantling of a private residence in Yoshida-cho, Akitakata City, to our base in Koda-cho, where we will reuse them and, together with participants, learn and practice place-making through processes of circulation. We will inspect the building materials prior to demolition, consider methods for dismantling and repurposing the house, and construct a doma (traditional earthen floor) so that it can serve as a cultural hub in this depopulated area. In addition, we will establish a system for decomposing the various organic resources generated through this activity, deepening reflection on resource circulation, the relationship between everyday life and creative practice, and the connections between people and nature.





2025年度プログラム

分解と循環を考える（コンポスト実践ワークショップ）

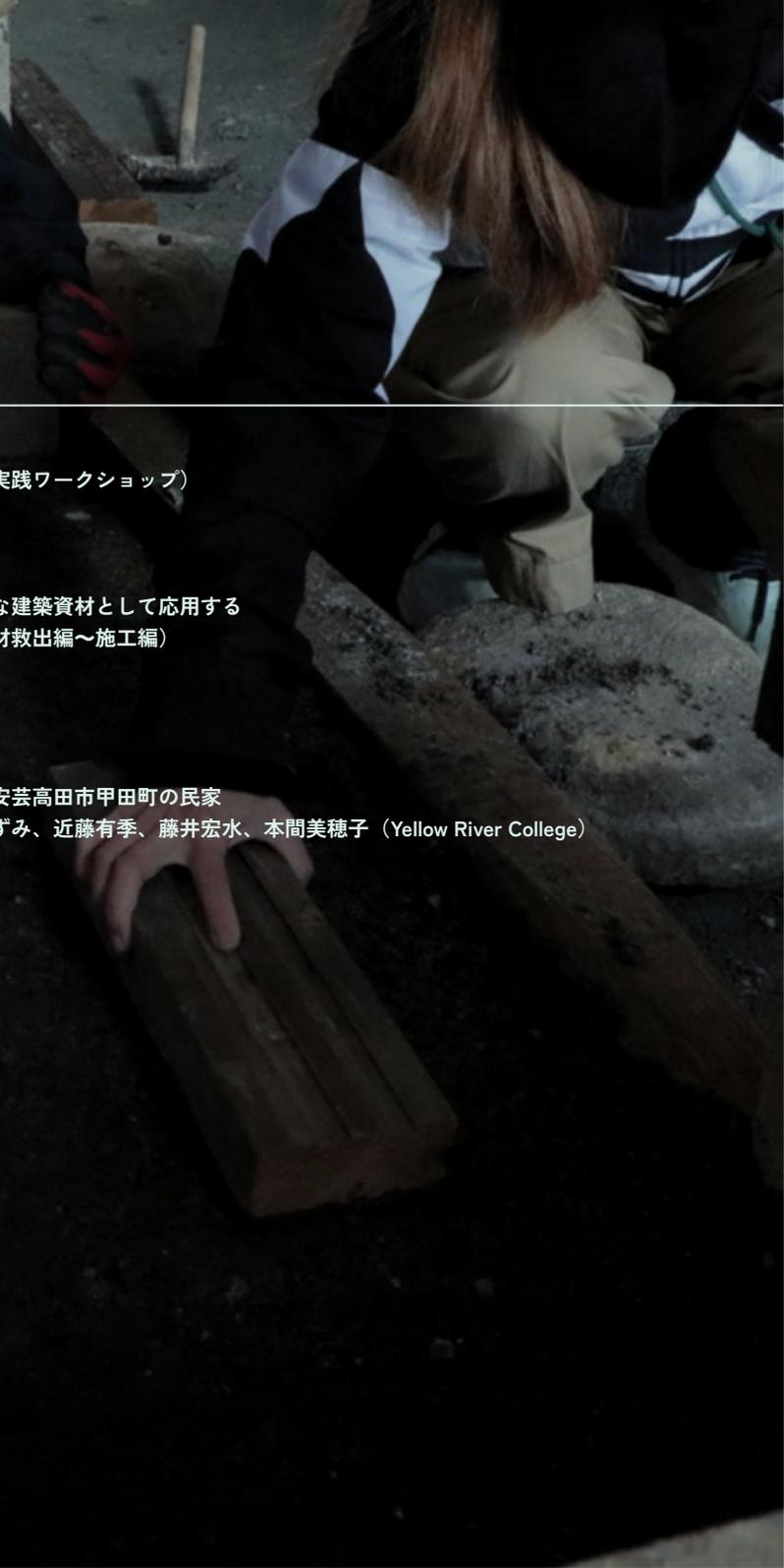
- ①2025年8月22日（金）13:30-17:00
- ②2025年10月21日（火）11:00-15:00

地域資源と廃材を、エコロジカルな建築資材として応用する （土間たたきワークショップ 廃材救出編～施工編）

- ①2025年7月11日（金）10:30-15:00
- ②2025年10月22日（水）11:00-15:00
- ③2025年12月6日（土）10:30-15:30

会場 安芸高田市吉田町の民家、安芸高田市甲田町の民家

講師 福田恵、内野康平、内野いずみ、近藤有季、藤井宏水、本間美穂子（Yellow River College）



分解と循環を考える (コンポスト実践ワークショップ)

日時 ①2025年8月22日(金) 13:30-17:00
②2025年10月21日(火) 11:00-15:00

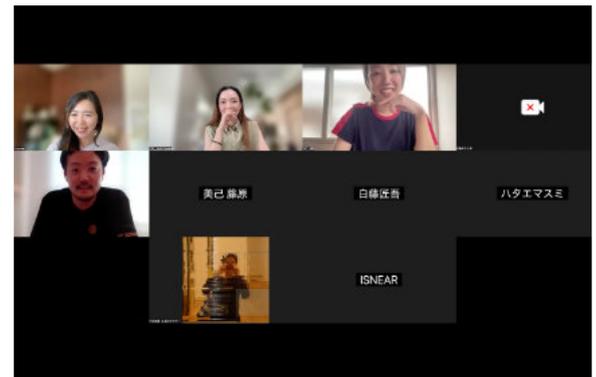
会場 ①オンライン

②安芸高田市吉田町の民家、安芸高田市甲田町の民家

講師 福田恵、内野康平、近藤有季、本間美穂子 (Yellow River College)

①前半はYellow River Collegeメンバーによる巡回式レクチャーを実施した。2021年の団体設立を起点に、様々な経験や論考をそれぞれの視点から発表・共有した。また、受講生のコンポスト実践経験も紹介してもらい、相互理解を深めながら共時性を確認した。後半は建築家・内野康平によるワークショップを行い、ペットボトルを用いた簡易コンポストを作成した。日常と連続させるために、生活の中で実践して2ヶ月後のワークショップで持ち寄ることとした。

②前半はエコロジカルな建築資材としての応用可能性を探るために、吉田町の空き家跡地を再訪し、解体後に残された建材や家具等を確認した。後半は甲田町の空き家に移動し、コンポスト設備の組み立てと柿渋による保護塗装を行い、敷地内の庭に設置。各自が持ち寄ったコンポストを投入した。受講者との共同作業や情報共有、意見交換を通じ、分解や循環の概念を創造的に拡張すること、また甲田町の空き家に応用する可能性を模索した。





地域資源と廃材を、エコロジカルな建築資材として応用する（土間たたきワークショップ 廃材救出編～施工編）

日時 ①2025年7月11日（金）10:30-15:00
 ②2025年10月22日（水）11:00-15:00
 ③2025年12月6日（土）10:30-15:30

会場 安芸高田市吉田町の民家、安芸高田市甲田町の民家

講師 福田恵、内野康平、近藤有季、本間美穂子（Yellow River College）

協力 田村真悠、岡埜美佐子（SDGs研修センター）

①第1回目では、安芸高田市にある2軒の空き家を訪問した。まず、廃建材を最終的に適合する甲田町の空き家（会場1）とその周辺の視察を行い、立地環境やプロジェクトコンセプト等を確認した。バス移動の後、豪雨災害により解体予定の吉田町の空き家（会場2）では、家の図面を手に多様な建材や様式、工法等を観測した。地政学的な視点や家の成り立ちを巡りながら、解体後の建築廃材をどのように文化的に再生できるのか、その可能性を探った。その後グループに分かれて検討・発表を行い、救出したい建材を決定した。

②近隣の廃校を拠点とする地域団体「SDGs研修センター」を視察し、環境教育の事例を学ぶとともに、広島産の牡蠣殻を提供していただいた。その後、甲田町の空き家で粉碎した牡蠣殻や古民家の建築廃材、庭の土等を混ぜ合わせ、三和土（たたき）のプロトタイプを作成した。山間部としての周辺資源だけではなく、離れた海洋部の資源を合わせる中で、里山と海との繋がりが感じられる機会となった。また、豊富な地下水と植物による藍染ワークショップを体験し、ものを作り出す場としての空き家活用の可能性を体験した。

③最終回となる第3回目では、左官職人と建築家の指導のもと、空き家の土壁や畳などの廃材、地域の土や牡蠣殻を配合した土間たたき施工を実施した。材料の混合作業からたたき締めまでを体験し、身近な自然素材から住居ができるプロセスを体験した。本プロジェクトは、高齢化や人口流出、空き家、豪雨災害といった現代の地域課題や自然環境を踏まえ、改修箇所とその素材や方法、また、取って残す箇所を慎重に検討しながら進めている。今後も関係者と共に文化的に開く可能性を探り、過去と未来を創造的につなぐ取り組みを継続するものである。





後始末的な創造か、創造的な後始末か (今日の終わりを明日に還していくために)

本間美穂子 (Yellow River College)

わたしたちYellow River Collegeがひろしまアーツカレントに持ち込んだテーマは「分解と循環」。一連の講座では、身体的な経験と創造的な思考をとまなうものづくりを、意欲的な参加者の方々とともに行うことができた。そのなかで改めて以下3点について振り返ってみたいと思う。

(A) いま、ものをつくること

それぞれがアーティスト・デザイナー・建築家という専門領域をもったメンバーが集まったYellow River Collegeだが、共通するのは「ものをつくる」ことを生業としている点である。ものづくりの担い手としてどう環境問題と向き合うのかという点はわたしたちの大きな課題のひとつであり、それについて議論を交わし、大学生向けの講義を開催するなどの活動を行ってきた。

それを踏まえてこのたびの一連の講座を通して目指したことは、【①“わたし”と環境との直接的な関わり】また【②つくること・壊すことを通じた資源との自覚的な関わり】について一緒に学んでいくことである。

実際には【①“わたし”と環境との直接的な関わり】をテーマとして、各々の家庭や『100年後、土に還る家』の庭にコンポストを設置し、自分の暮らしを土(身近な自然環境)とつなぐ実践と観測を行った。偶然にも隣人の方の庭に置かれたコンポストと地続きで背中合わせに設置できたことにも、いずれ意味が生まれてくるかもしれない。またテーマ【②つくること・壊すことを通じた資源との自覚的な関わり】においては、解体予定の空き家から出た廃棄予定の建材の再利用について検討するワークショップから始まり、廃棄建材(土壁や畳など)や地域資源(近隣地域の土や瀬戸内の牡蠣殻)を混ぜた素材で土間を施工するという、「壊すつくる」の小さな循環を実践することができた。

これらの試みは、自分と環境を結ぶ「暮らし」という行為のサイクルの矢印を可視化するとともに、一方的な生産行為とはちがうものづくりのあり方を見出す糸口となった。

(B) 適切に介入すること

わたしたちは『100年後、土に還る家』を起点として、自然環境、地域の歴史や資源、そこに暮らす人たち、家に宿る個人的な記憶などに対して、適切な介入の仕方を考え続けている。

このたびのワークショップやオンライン講座において、わたしたちは「解体され姿を失う家」「次の姿へと再構築される家」「微生物たちの住む庭」を舞台としてきた。それらをつないでひとつのサイクルへ乗せるのは、廃棄予定だった建材の再利用という点だけでなく、周辺環境と暮らしを再接続する点において、またかつてその家や地域にあった暮らしや歴史を語り継いでいくという文化的な視点からも必要な介入だったと考えている。

近い地域の中で建材を移動させること、それぞれの家庭からひとつの庭へ生ごみなど有機物を集合させること、瀬戸内海から山間部へ運ばれた廃棄牡蠣殻を土に混ぜること。講座を通してさまざまな人たちが集い、廃棄予定だった資源たちはかたちと役割を変える。つながり、育ち、還ろうとする。健全な循環に導いていくことが、今やるべき介入のあり方なのだと思う。

それと同時に『100年後、土に還る家』が、人間はもちろん、微生物・動物・植物などの介入を受け入れながら育っていくための形や方法を模索している。

(C) 未来を考えること

わたしたちYellow River Collegeは、『100年後、土に還る家』という空き家の改修を通して環境・資源・文化・暮らし等との関わりについて思考・実践のためのプロジェクトを継続して行っている。ところが、じつはプロジェクトのテーマの根幹である「100年後」という未来のイメージを掴むことが非常に難しい。これまででも展覧会やワークショップを通してさまざまな人たちと議論を交わしてきたのだが、どうしても

Yellow River College members

福田 恵 FUKUDA Megumi

プロジェクト代表者紹介ページ（100P）に記載。

内野 康平 UCHINO Kohei

一級建築士・建築家。広島・福岡・種子島など西日本を中心に、商業施設や住宅、分野に問わず活動中。日本に5カ所宿泊施設を運営中。現在西アフリカ・セネガルでの宿泊施設のプロジェクトや設計活動も展開中。

内野 いずみ UCHINO Izumi

福岡・東京とパッケージデザイン事務所に勤務後、鹿児島県種子島に移住。デザイン事務所「案図舎」を立ち上げ、パッケージに限らず日本中の様々なデザインをしている。JPDA(日本パッケージデザイン協会)会員。

近藤 有季 KONDO Yuki

広島を拠点に、アートディレクター／デザイナーとして、主に企業ブランディングや商品・サービスの開発・PR・販売促進などに従事。新規事業創出やブランディング、Webサイトの制作やデザインマネジメントまで。クライアントの課題に奔走しながら様々なプロジェクトを支援している。

藤井 宏水 FUJII Hiromi

国際交流プロジェクトや舞台芸術・アート・デザイン分野のプログラムの企画制作・広報として活動。展覧会、クリエイター・イン・レジデンスなどを通じた、クリエイターの実験的な創作活動のサポートや発表批評の「場」づくりを継続的に行う。

本間 美穂子 HONMA Mihoko

デザイナー・アートディレクターとして、企業ブランディングや新規サービス開発を主な領域として東京を拠点に活動。対象の中心へと掘り進めることによって見出される潜在的な価値を、言語化・ビジュアライズの両面からじっくり育て、実直に伝えていくデザインアプローチを行っている。

「技術の進歩による発展こそが未来」という視点がついて回ってきてしまう。1920年に発刊された『日本及日本人』という雑誌の「百年後の日本」特集においては、公用語が英語になっていたり太陽光エネルギーによる貯電が可能となっていたり3Dホログラムによる通話や地球・火星間の通信など、絶妙に当たっているような外れなような予測がなされていたが、それでもやはりその下敷きにあるのは科学技術の発展・人口増大など、すべてがエスカレーションへと向かうイメージだった。

しかし今この時代を生きるわたしたちには、それでは未来をうまく描けない。これまでの価値観に従わない視点が必要になってきているのだ。たとえば「つなぐ・育む・還す」というキーワードを軸に未来を考えることができたなら、これまでの未来観とはちがった景色が見えてくるだろうか。自分はきっと生きてはいないだろう100年後に、何をつなぎ、何を残さないのか、その責任を常に問われている。

連携団体 Partner Organization

Yellow River College

安芸高田市にある空き家改修計画を契機に2021年に結集した、アーティスト、デザイナー、建築家等によるアーティスト・コレクティブ。人間の自然との関わりや風土の中で生まれ育つ生活様式・価値観など、およそ人間と人間の生活に関わる総体を広義の「文化芸術」と捉え、その文化芸術を通じ、芸術文化の振興と地域社会の発展、新たな枠組み・価値観の創出、また、その担い手となる人材の育成、ネットワークづくりを目的に活動している。地球環境が急速に変動し、作り手が担う役割が問われている現代において、安芸高田市の空き家を思想的実験・実践の場として活用するための方法について、多種多様な論考と実験を重ねる。

Yellow River College

An artist collective formed in 2021 by artists, designers, architects, and others, brought together through a vacant-house renovation project in Akitakata City. They understand 'culture and the arts' in the broadest sense—encompassing the full scope of what pertains to human beings and human life, including our relationship with nature and the ways of living and values nurtured within the land and climate of a place. Through this understanding of culture and the arts, they work toward promoting artistic and cultural activity, developing local communities, creating new frameworks and values, nurturing those who will carry this work forward, and building networks. In an era when the global environment is changing rapidly and the role of creators is increasingly called into question, they continue to pursue wide-ranging inquiry and experimentation into how vacant houses in Akitakata City can serve as sites for conceptual and practical experimentation.

プロジェクト 4

広島市における自然環境の活用方法を体験し、 その賑わいをつくる

Exploring ways to engage with Hiroshima's natural environment and cultivate new forms of vitality

プロジェクト代表

藤江竜太郎（広島市立大学芸術学部准教授）

プロジェクトスタッフ

ジョン・テヨン（広島市立大学芸術学研究科博士前期）

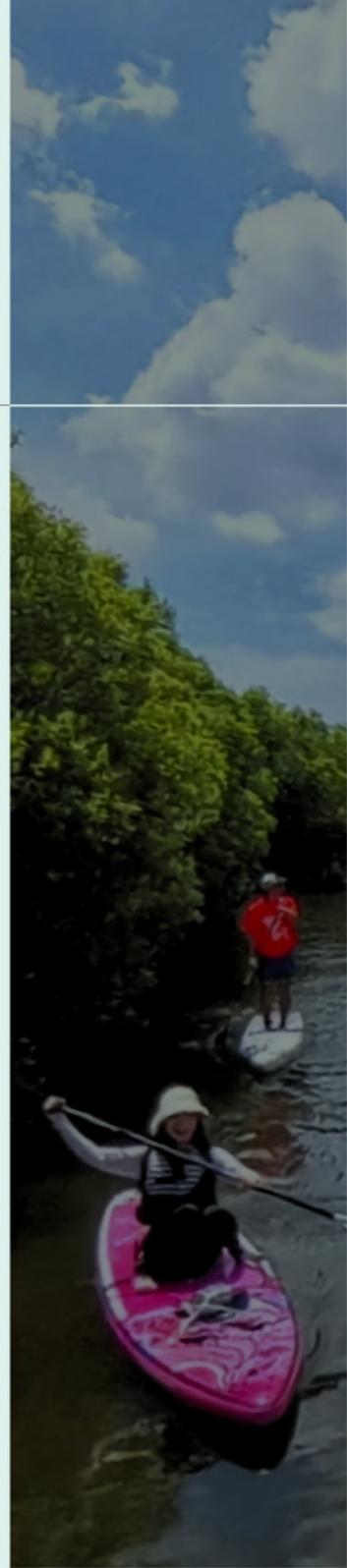
川端万結子（広島市立大学実習補助員）

PROJECT 4

広島市における自然環境の活用方法を体験し、 その賑わいをつくる

本活動では広島市の地形から生まれた歴史文化をもとに、自然とどのように共存してきたかを既存の自然環境を活用した活動を行う市民団体から知識と経験の伝承を通して学びます。現状として広島に何があり、どんなことができるのか、またどんなことが行われているかを情報として体験的にインプットすることにより、自らがアーティストとして関われることを模索しフィールドワークを中心に実験的に活動する方法を身につけます。自然環境を軸に都市形成におけるクリエイティブな活動を担う人材を育成します。

This program draws on the history and culture shaped by Hiroshima's topography to explore how people have coexisted with nature. Participants learn through knowledge and experience passed down by local citizen groups engaged in activities that utilize existing natural environments. By experientially taking in information about what currently exists in Hiroshima—what is possible and what is already being practiced—participants explore how they can engage as artists and acquire methods for experimental practice centered on fieldwork. The program fosters individuals capable of undertaking creative practices in urban development grounded in the natural environment.



2025年度プログラム

広島川の川（太田川）ワークショップ

①広島川の川、水辺から街を観察するワークショップ

日時 2025年7月12日（土）9:00-15:00

会場 楠木町大雁木、鷺島、大芝水門、
原爆ドーム、ひろしまゲートパーク

②広島川の川を彩るタープ制作

日時 2025年11月21日（金）9:00-13:00

会場 River Do!フィールド

③イベントの運営と記録動画撮影

日時 2025年11月23日（日）7:00-15:00

会場 River Do!フィールド

④広島川の川：雁木論議

日時 2026年2月27日（金）19:00-20:30

会場 MAGICISLAND stadium park

広島川の里山（広島南アルプス）ワークショップ

①山歩き入門講座

日時 2025年6月22日（日）9:00-16:00

会場 似島：下高山

②山道の整備講座

日時 2025年7月5日（土）8:00-15:00

会場 広島市立大学～鍛投峠

③山歩きを撮影する

日時 2025年11月30日（日）8:00-15:00

会場 宮島：弥山

④イチダイトレイルを試走する

日時 2026年2月11日（水・祝）9:00-17:30

会場 JR三滝駅～広島市立大学

広島川の里山（比治山）ワークショップ

①セミの観察会説明会

日時 2025年7月2日（水）19:00-22:00

会場 そらさキッチン、そらさ公園

②セミの観察会

日時 2025年7月22日（火）19:00-22:00

会場 比治山公園

③セミ時雨を描くワークショップ

日時 2025年8月9日（土）10:00-16:30

会場 広島市現代美術館、比治山公園

広島川の川（太田川）ワークショップ

協力：River Do!川辺コンソーシアム

広島川の川、水辺から街を観察するワークショップ

日時 2025年7月12日（土）9:00-15:00

会場 楠木町大雁木、鷺島、大芝水門、原爆ドーム、ひろしまゲートパーク

SUP(Stand Up Paddleboard)入門講座

SUPの基本的な操作方法とルール。楠木大雁木から大芝水門と原爆ドーム視察。



広島川の川を彩るタープ制作

日時 2025年11月21日（金）9:00-13:00

会場 River Do!フィールド

マリンスポーツの廃品を使ったタープのデザインと配置を考える。

ロープの結び方、使い方の習得。

ロープと布、ポールで自立構造を作るためにはどうするか。



イベントの運営と記録動画撮影

日時 2025年11月23日（日）7:00-15:00

会場 River Do!フィールド

太田川でのSUP大会運営に参加して、企画運営の現場を知る。

動画撮影の補助を行い、撮影の基本を習得。

魅力的な動画を撮影するにはどうするかを学ぶ。



広島川の川：雁木論議

日時 2026年2月27日（金）19:00-20:30

会場 MAGICISLAND stadium park

広島川の川、雁木の歴史から水辺との関係性を探る。

広島における河川の活用法を議論する。



広島の里山（広島南アルプス）ワークショップ

協力：広島湾岸トレイル協議会

山歩き入門講座

日時 2025年6月22日（日）9:00-16:00

会場 似島～下高山

コンパスを使って地図上の位置を把握する。ロープの使い方結び方。水分の取り方について。

コース

似島港～似島峠（2）～下高山登山口・山頂分岐（4）～202.8峰/下高山（5）/約2.2km～下高山登山口（6）～外方の鼻入口（10）～外方の鼻（13）/約2.0km～（10）～（6）～似島峠（2）～似島港（1）/約2.6km...

歩行距離 G T 約6.8km / 歩行時間約4時間

*（ ）内数字は配布地形図に掲載の順路

山道の整備講座

日時 2025年7月5日（土）8:00-15:00

会場 広島市立大学～鋸投峠

登山道の整備の仕方、水分の取り方について。

コース

広島市立大学～市立大登山口～丸山～甑岩～鋸投峠登山口

歩行距離 G T 約4km / 歩行時間約4時間

山歩きを撮影する

日時 2025年11月30日（日）8:00-15:00

会場 宮島～弥山

Profileカメラを用いて登山活動を記録する。

コース

宮島口～宮島栈橋～大元公園～駒ヶ林（昼食）～弥山～大聖院～宮島栈橋～宮島口歩行距離 G T 約5km / 歩行時間約4.5時間

イチダイトレイルを試走する

日時 2026年2月11日（水・祝）9:00-17:30

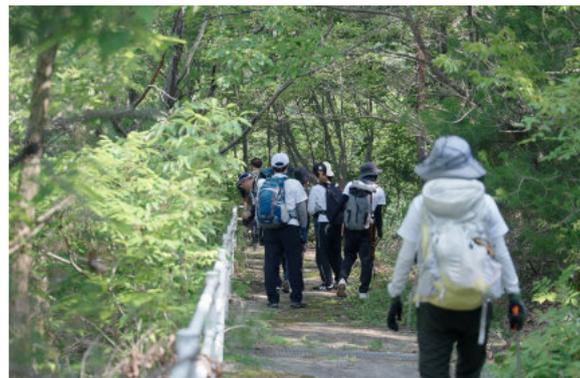
会場 JR三滝駅～広島市立大学

山歩きとトレイルランニングを体験し、その装備品について知識を得る。

トレイルグループと露レイルランニンググループに分かれて実施。

コース

JR三滝駅～三瀧寺入口～224峰・宗箇山分岐～宗箇山（356m）～大茶白山分岐～鋸投げ峠～丸山～426峰南～広島市立大学正面玄関 / 7.3km /





広島の里山（比治山）ワークショップ

協力：SATOMACHI

セミの観察会説明会

日時 2025年7月2日（水）19:00-22:00

会場 そらさやキッチン、そらさや公園

・セミの観察会運営講座

SATOMACHI 和田徳之さんからセミの観察会のこれまでの取り組みについて説明。
広島県自然観察指導員 上田康二さんからセミの観察に関わる注意点と昆虫観察の魅力を講義。教育コーディネーター 川口健史さんからは子供の体験に関してどのような事に気を配るか講義。

・夜の空鞆公園にてセミの羽化を観察。（羽化は観察出来ず）関係者スタッフとの交流会を行う。場所 / 時間：そらさや公園 / 20:30

セミの観察会

日時 2025年7月22日（火）19:00-22:00

会場 比治山公園

・セミの観察会講座

広島県自然観察指導員 上田康二さんからセミの観察に関わる注意点と昆虫観察の魅力を講義。実際に広島県自然観察指導員、SATOMACHIのスタッフメンバーと子供24名と共に比治山公園を散策しセミの羽化を観察。

・夜の比治山公園にてセミの羽化を観察。場所 / 時間：比治山公園 / 18:00

セミ時雨を描くワークショップ

日時 2025年8月9日（土）10:00-16:30

会場 広島市現代美術館、比治山公園

比治山公園で行われたセミ♡カーニバル（SATOMACHI主催）の中で広島市現代美術館のガラスに蝉時雨を描くワークショップを企画開催。

事前予約者40名、飛び入り参加を含めると合計86名の大人から子供までが思い思いに蝉の鳴き声を描いた。一部は8月末まで展示。





今年度の活動について

藤江竜太郎（広島市立大学芸術学部准教授）

今年度のプロジェクトは、「山の活動」「川の活動」「セミの活動」の三つのテーマで進めた。当初は、すべての学生が全ての活動に参加することを想定していたが、実際に動き始めてみると参加状況には偏りが生じた。結果として、山の活動に7名、川の活動に4名、セミの活動に1名が主に関わる形となった。

活動は同時進行で行い、山の活動は6月から2月まで、川の活動は7月から11月、セミの活動は蝉の時期に合わせて7月から8月に実施した。長期間にわたる活動もあったが、学生の様子を見ると、短期間で集中的に行う方が参加しやすい傾向があることが分かった。

山の活動

山の活動では、広島湾岸トレイル協議会の田川会長に多くの時間を割いていただき、実践的な山歩きを通じた学びを行った。里山の歩き方に始まり、地図の読み方や方位磁針の使い方、装備の考え方、水分補給の仕方、ルート設定、雨具の着方、毒虫やクマへの対処法など、山に入る上で必要な知識を一通り教えていただいた。また、トレイルコースの整備といった管理運営に関する話もあり、山を「使う」だけでなく「守る」視点を学ぶ機会となった。

一方で、夏の暑い時期に活動を行ったため、体力的な理由から途中で離脱する学生もいた。

デザインとしての取り組みは、まず山を歩く人たちをよく知ることから始めた。装備や服装、行動を観察し、話を聞く中で、「若い世代にも手に取りやすい協議会のグッズを作れないか」という話が出てきた。そこから話が広がり、最終的にはロゴマークのリニューアルをお願いしたいという依頼につながった。グラフィックデザインの観点から納島教授にも助言いただき、ロゴデザインの制作に取り組んでいる。

現場で一緒に活動する中から、自然な形でデザインの仕事が生まれたことは印象的な出来事だった。なお、この活動は現在も継続中である。

川の活動

川の活動では、まず川から広島市の街を見ることを目的に進めた。River Do!川辺コンソーシアムの方々から川の歴史について話を聞く予定もあったが、スケジュールの都合で実現せず、今後の課題として残っている。

7月にはSUPを使い、大芝水門から平和公園までを川から移動しながら観察した。川から見える景色を記録することを計画の軸としていたが、SUPの操作に慣れるまでに時間がかかり、活動回数も限られていたため、十分に組み込まなかった点は反省点である。

一方で、全日本SUP選手権では学生がイベント設営に関わった。使われなくなったヨットの帆やウインドサーフィンのマストを再利用して設えた大きなタープは、川辺を通る人の目を引き、イベントの象徴となった。学生たちは実際に手を動かしながら、公共空間でデザインが果たす役割や、場に関わる面白さを実感していたようだった。大会当日も朝早くから会場に入り、運営補助や写真撮影などに積極的に参加した。

セミの活動

セミの活動では、7月に空鞆公園で関係者から活動の趣旨や、なぜ今セミなのかについて話を聞いた。その後、比治山公園で行われた子ども向けの観察会に同行し、蝉の羽化を観察した。最初はなかなか見つけられなかったが、次第に目が慣れ、あちこちで羽化する蝉を見つけるようになり、その様子に強く引き込まれていった。

参加した学生は虫が得意ではなかったものの、興味を持って取り組み、後日、蝉をモチーフにした絵を制作した。その絵を使って下敷きを作るなど、アウトプットへとつなげていった。

活動の集大成として、広島市現代美術館でワークショップ「みんなで蝉時雨をかこう」を実施した。ガラス面いっぱいに描かれる蝉の鳴き声と、背後に見える比治山の風景が重なり、印象的な時間となった。ナイトイベント「蝉カーニバル」は雨天のため中止となったが、比治山を舞台にした取り組みを体験できたことは、学生にとって貴重な経験だったと考えている。

1年目の活動を通して、多くの手応えと同時に、運営や参加のあり方についての課題も見えてきた。今後は、学生が無理なく関わられる形を模索しつつ、自然と向き合いながら創作活動を行っている実践者を講師として招くなど、活動を継続・発展させていきたい。



連携団体 Partner Organization

RiverDo!川辺コンソーシアム

2021年発足。コロナ禍において基町環境護岸で社会実験として実施されたパブリックスペースのオープン化に参加した民間事業者やNPOが中心となり結成された。中心市街地を流れる太田川を民間主体で最大限に活用し、水辺空間の魅力を発信していくことで、更なる「水の都ひろしま」の空間創出に貢献し、全国の河川空間オープン化の道標になることを目指している。

広島湾岸トレイル協議会

2016年設立。広島にロングトレイルを作ろうという発想で、広島市周辺の山々をつなぎ、古鷹山～休山～烏帽子岩山～絵下山～鉾取山～三本木山～白木山～冠山～武田山～鈴ヶ峰山～極楽寺山～弥山をめぐる280.4キロメートルのコースを作る。このコースを多くの方に歩いてもらうために、登山道の整備、管理、マップ作成、イベントなどを展開している。

SATOMACHI

「街中の自然を味わう仕掛けで、未来を創る。」
足元にある自然を暮らしにもう少し活かしたら。知識も経験もあまりないけど、“さと”と“まち”をつなぎ和えることで、みなさんと一緒に学びながら、街中でも自然の恵みを見出し、暮らしを楽しく豊かにしていきたいと始まったプロジェクト。自然豊かな里山だけでなく、都市の中に残っている自然をもっと暮らしに活かしたいと活動している。
“まち”の中に“さと”を見出したり、“まち”から“さと”へ誘ったり、“さと”と“まち”を和えるライフスタイルを提案している。

River Do Consortium

Founded in 2021, it was formed primarily by private businesses and NPOs that participated in a social experiment to open up public spaces along the Motomachi environmental riverbank during the COVID-19 pandemic. By maximizing the use of the Ota River, which flows through the city center, under private-sector leadership, and by promoting the appeal of waterfront spaces, the organization aims to contribute to the further creation of spaces befitting ‘Hiroshima, City of Water,’ and to serve as a model for the opening up of river spaces across Japan.

Hiroshima Bay Trail Council

Established in 2016, it was conceived with the idea of creating a long trail in Hiroshima. Connecting the mountains surrounding the city, it forms a 280.4-kilometer course that traverses Furutakayama, Yasumiyama, Eboshiwayama, Eshitayama, Hokitoriyama, Sanbonkiyama, Shirakiyama, Kanmuryama, Takedayama, Suzugamine, Gokurakuji, and Misen. In order to encourage more people to walk this course, the council maintains and manages trails, produces maps, and organizes events.

SATOMACHI

Creating the future through ways of savoring nature in the city.
If the nature at our feet could be brought a little more into everyday life. This project began with the desire to learn alongside everyone, and even without much knowledge or experience, to connect and blend sato and machi, finding the gifts of nature even within the city and making everyday life more enjoyable and enriching. The project works not only with the nature-rich satoyama, but also to bring the nature that remains within the city more fully into daily life.
It proposes a lifestyle of finding sato within machi, drawing people from machi toward sato, and blending sato and machi together.

プロジェクト5

太田川を遡上して、その文化と歴史を響かせ映す

Tracing the Ota River upstream, reflecting and resonating with its culture and history

プロジェクト代表

吉田真也（リフレクティング・ヒロシマ）

プロジェクトスタッフ

山本功、原琉太（リフレクティング・ヒロシマ）

PROJECT 5

太田川を遡上して、その文化と歴史を響かせ映す

川に基づくナラティブをベースとした作品で知られるアーティストの前田耕平を広島に招き、広島市を流れる太田川を舞台とした新作プロジェクトを展開します。受講生は、ワークショップ、パフォーマンスに携わることで、行為ベースの作品の制作スキルを深めることを目指します。

アーティストは河口からスタートし、船で遡上していきます。その過程で雁木に立ち寄り、都度パフォーマンス（詩を読む等）のアクティビティを展開し、詩的な営みを川岸から川岸へ伝達させながら、都市の歴史や営為を眼差す作品を制作します。

We invite artist Kohei Maeda, known for his river-based narratives, to Hiroshima to develop a new project centered on the Ota River flowing through the city. Participants will aim to deepen their skills in creating action-based works through workshops and performances.

The artist will start at the river mouth and travel upstream by boat. Along the way, he will stop at each ganki (historic stone-stepped riverbank landings unique to Hiroshima) to perform activities such as reading poetry, carrying poetic acts from one riverbank to the next while creating works that cast a gaze upon the city's history and human activities.



2025年度プログラム

前田耕平「雁の便り」プロジェクト

①事前ワークショップ

ワークショップ#1『風景と言葉の便り』
日時 2025年6月21日（土）13:00-18:00
会場 AIR Hiroshima Gallery
講師 前田耕平、中川晶一朗

ワークショップ#2『外側と内側の便り』
日時 2025年7月12日（土）9:00-17:30
会場 広島市青少年センター
講師 前田耕平、倉本裕梨

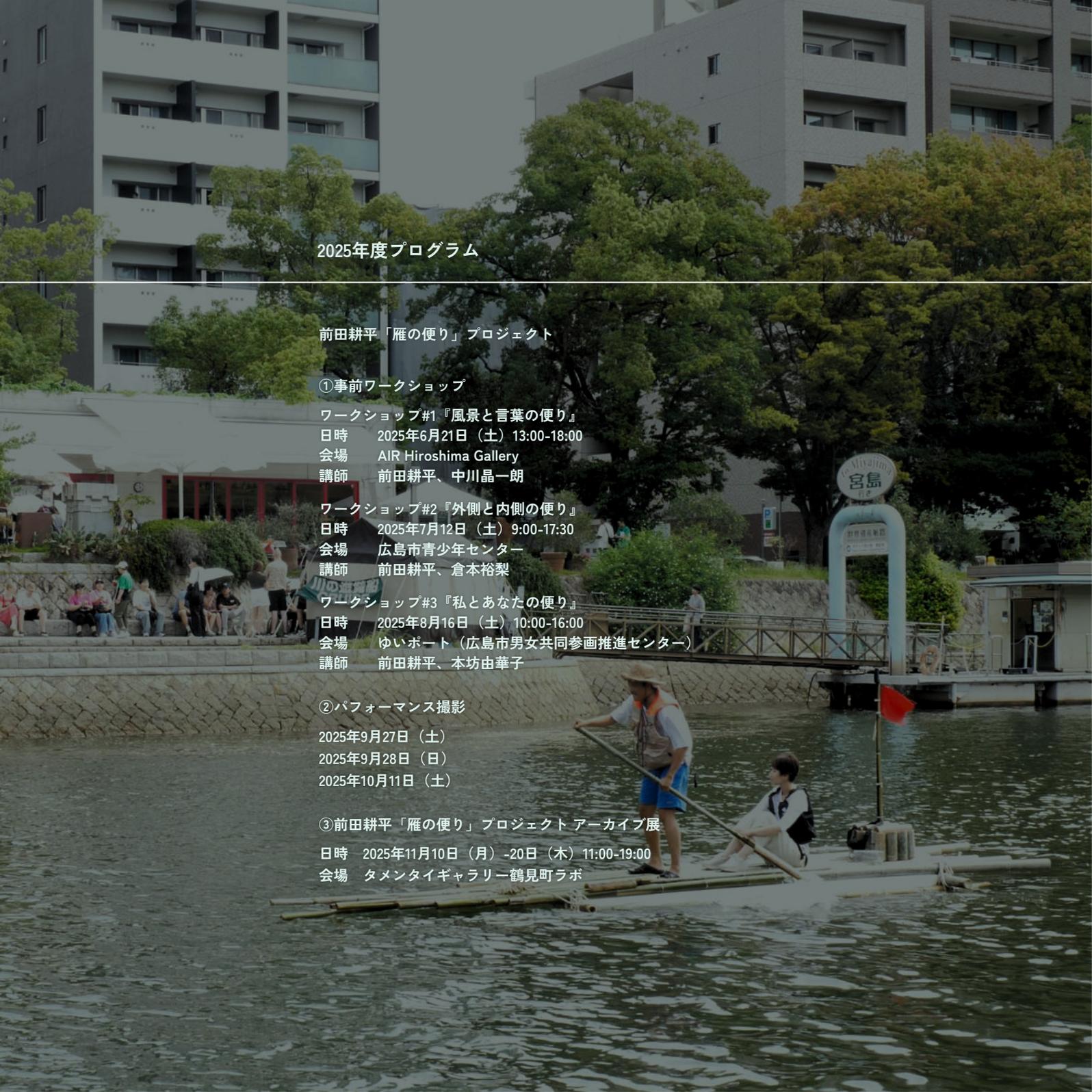
ワークショップ#3『私とあなたの便り』
日時 2025年8月16日（土）10:00-16:00
会場 ゆいポート（広島市男女共同参画推進センター）
講師 前田耕平、本坊由華子

②パフォーマンス撮影

2025年9月27日（土）
2025年9月28日（日）
2025年10月11日（土）

③前田耕平「雁の便り」プロジェクトアーカイブ展

日時 2025年11月10日（月）-20日（木）11:00-19:00
会場 タメンタイギャラリー鶴見町ラボ



前田耕平「雁の便り」プロジェクト 事前ワークショップ#1 『風景と言葉の便り』

日時 2025年6月21日（土）13:00-18:00

会場 AIR Hiroshima Gallery

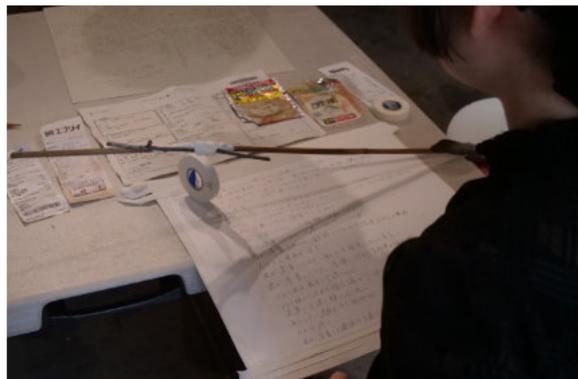
講師 前田耕平、中川晶一郎

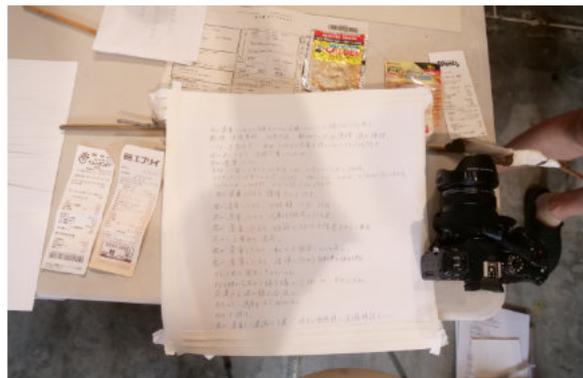
太田川の風景と言葉を結びつけることをテーマにワークショップを実施した。ゲスト講師として、言葉を扱う表現活動を行っている中川晶一郎氏をお招きした。受講者とゲスト講師は太田川に出かけ、川の外側から風景をそれぞれの方法で記録した。その後、記録した素材と自身のテキストを組み合わせる試みを行い、風景とことばの新たな関係性を探った。

ゲスト講師

中川 晶一郎 NAKAGAWA Shoichiro

1984年、広島生まれ・在住。2004年より投稿サイト「現代詩フォーラム」等で自由詩と出会い、投稿を開始。以降、言葉による表現と並行して油彩・水彩による視覚作品も制作。2020年以降はバンド「月曜日のユカ」への詩の提供を通じ、音楽とのコラボレーションにも取り組む。2023年、自薦詩集『回游灯』『逗留の皿』を刊行。言葉、風景、音の境界を行き来しながら、实在性を問い直す詩作を続けている。





前田耕平「雁の便り」プロジェクト 事前ワークショップ#2 『外側と内側の便り』

日時 2025年7月12日（土）9:00-17:30

会場 広島市青少年センター

講師 前田耕平、倉本裕梨

ゲスト講師として写真家の倉本裕梨氏を迎え、「川の外側と内側から風景を見つめなおす」をテーマにワークショップを実施した。

受講者は、倉本氏による作品紹介および川に関するレクチャーを受講した後、屋外に出て雁木タクシーに乗り、指定された条件のもとで撮影を行った。撮影後は青少年センターに戻り、各自が撮影した写真を選定し、プリントアウトして机に並べるほか、プロジェクターで投影しながら講評を実施した。

最後に、前回のワークショップで出された宿題「お気に入りの雁木を撮影してくる」について、前田氏を中心に全員でフィードバックを行い、意見交換を行った。

ゲスト講師

倉本 裕梨 KURAMOTO Yuri

1997年生まれ広島県出身。2022年多摩美術大学修士前期課程修了。ノルウェーへの留学を経て現在東京を拠点に写真作家として活動中。子供時代に過ごした広島での経験を元に、碑、風景、写真の関係性を探ることを基礎的なテーマとして作品を制作する。





前田耕平「雁の便り」プロジェクト 事前ワークショップ#3『私とあなたの便り』

日時 2025年8月16日（土）10:00-16:00
会場 ゆいポート（広島市男女共同参画推進センター）
講師 前田耕平、本坊由華子

劇作家の本坊由華子氏をゲスト講師にお招きし、乗船パフォーマンスにおける「表現や行為の強い動機、欲求、思想、意思、態度」を、舞台上で身体を通じてどのように発することができるかを考えることを目的としてワークショップを実施した。午前中は、前田氏がチューターを務め、受講者の現状のパフォーマンスプランを全員で共有した。午後からは、本坊氏による身体表現のワークショップを行った。まず、簡単な準備運動に続き、地球に対して鉛直方向に重力を感じながら身体操作を行う「野口体操」を実施した。その後、筏に見立てた簡易ステージを配置し、本坊氏が「コミュニケーション」と呼ぶ、周囲の状況を感じながら動作を選択する即興的なゲームを展開した。

最後に、二人一組になり、体を預けたり引き込んだりと、互いの身体的力学を反響させ合うような「インプロビゼーション」という運動を行った。

ゲスト講師

本坊 由華子 HONBO Yukako

世界劇団主宰。全国から俳優とスタッフを集める舞台芸術団体。拠点を日本に掲げ、精力的な国内ツアーを実施している。躍動感溢れる身体表現を積極的に取り入れたフィジカルシアターの手法が作風の一つである。

第10回せんがわ劇場演劇コンクールオーディエンス賞（2019年）。東京芸術祭2020アジア舞台芸術人材育成部門APAF young farmers camp 修了。2023年1月に三重・津あけぼの座プログラムディレクターに就任。





パフォーマンス『雁の便り』

リハーサル 2025年9月15日（月）
 パフォーマンス撮影 2025年9月27日（土）28日（日）10月11日（土）3日間
 パフォーマンス・アーティスト 前田耕平
 乗船パフォーマー 山本志帆、川島桃香、高山太一、吉本あい、今井みはる、
 大森廣明、中川朔

9月15日にパフォーマンスのリハーサルを行い、9月27日・28日・10月11日の3日間で本番のパフォーマンスおよび撮影を実施した。

9月27日

初日は、元安川の河口付近から講師の前田が遡上する形で筏を漕ぎ始め、参加者（乗船パフォーマー）である高山太一、吉本あいが待機する雁木に立ち寄り、パフォーマーを筏に乗せて次の雁木まで運ぶ工程を繰り返した。その過程で、パフォーマーたちは前田とともに構想したパフォーマンスを、舞台装置として見立てられた「雁木」や筏の上で実践した。高山は仮面をモチーフとしたパフォーマンスを披露し、吉本は雁木の上でダンス的な身振りを展開した。撮影班は二手に分かれ、陸上から筏を追走しながら、雁木やそこへ到着する筏、パフォーマーの姿を記録していった。

9月28日

基町付近から鶴見橋あたりまでを移動し、パフォーマンスは大森廣明、山本志帆、中川朔といった幅広い年齢層の参加者が担当した。大森は雁木でギター演奏を行い、山本は筏の上で川底の砂を掬い、最後に雁木の上へと土砂を盛るパフォーマンスを行なった。中川は小学生であったため、両親が陸上から追走しながらの運行となった。





10月11日

最終日は、今井みはると川島桃香が乗舟パフォーマーとして参加した。比治山付近の雁木から出発し、川に浮かぶ筏という、隔離されながらも開かれた空間の中で、作家の前田と、前田の個展を担当する学芸員である今井との間で、作家／学芸員という関係性から生まれる、あるいはその関係が取り扱われたかのような親密な対話が展開された。

アーティストの川島は、かつて自身の個展で使用した石を、河口へと近づいていく筏の上から海へ還すパフォーマンスを行った。全てのパフォーマーの乗降を終えた前田は、一人、落日が迫る海へと帆を進めていき、これをもって全ての撮影工程を終了した。

前田が漕ぎ進める筏を中心に、撮影班やスタッフ、スチル撮影者、見学者などがリアルタイムでやり取りを行いながら移動していく。その一時的な共同体の活気の中に、この土地で生活する人々の身振りや、ささやかに反応する観光客の気配がところどころ映り込むことで、芸術的行為を通して「場所そのもの」が立ち現れてくる感覚があった。

前田耕平「雁の便り」プロジェクト アーカイブ展

会 期 2025年11月10日（月） - 11月20日（木） 11:00-19:00

会 場 タメンタイギャラリー鶴見町ラボ

「雁の便り」プロジェクトを包括するアーカイブ展を、広島市鶴見町のタメンタイギャラリーにて開催した。

入口のスペースには、本プロジェクトに関わった多様な所属の人々の相関関係を示すサインを設置し、台に置かれたリーフレットには、企画・運営を担当したリフレクティング・ヒロシマのメンバーによる言葉を掲載した。

メインのホワイトキューブでは、受講者のパフォーマンス写真と、自身に宛てた便りのテキストを両面に貼ったパネルを吊るし展示した。さらに、壁際には撮影当日にスタッフが記録した印象的な光景の写真とテキストを配置し、パフォーマンスと現場を支えたスタッフとの関係性を可視化した。

奥の和室には、計3回実施したワークショップの記録写真や受講者の成果物をファイリングし、閲覧できるようにした。壁面には、募集、面談、ワークショップ、リハーサル、撮影といった過程を写真とテキストでデザインした大型パネルを設置し、プロジェクトの流れと蓄積を示した。

これらの展示は、記録を丁寧に残してきたことを活かし、適切なレイアウトとデザインによって、複数の工程を重ね、様々な人が関わった本プロジェクトの複雑さを来場者に伝えることができた。また、過程の記録を含め、アーカイブ展として実績と資料を残すことで、広島における本プロジェクトの意義を改めて振り返る機会となった。



前田耕平「雁の便り」プロジェクト アーカイブ展



前田耕平（アーティスト）

1991年和歌山生まれ。兵庫県在住。
普段の制作活動では自らの身体的な体験を軸として、
人と自然の曖昧な領域に接触する。
かつての舟運の歴史的痕跡でもある「雁木」に焦点をあて太田川の
源と流を舟渡しする参加型プロジェクト「雁の便り」を発案し、
新作へと展開する。

主催：広島市立大学 企画・運営：リフレクティングヒロシマ

ご来場いただき誠にありがとうございます！
まずはじめに、このプロジェクトに関わる組織と、
プロジェクトの背景をご紹介します。
読み飛ばしても、本展示は楽しめます。

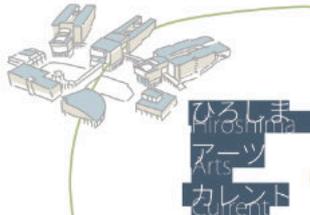
前田耕平を広島に呼んだ人たち。
複数回のリサーチやワークショップを行って
広島を見つめなおしている。
前田にも広島で何か取り組んでみないかと声をかけた

広島に来た前田耕平は、
広島在住の作家とともにリサーチをした。
長期的に携わるプラン「雁の便り」を考える。

「雁の便り」プロジェクトは
教育的プログラムとしてユニークなので、
リフレクティング・ヒロシマに実施企画を委託



REFLECTING HIROSHIMA



ひろしまアーツカレント

川辺や里山自然環境などで、資源循環や生態系を意識しながら
共生可能な身体性を獲得し、異なる専門性や知識で協働できる
芸術家育成を目指すためのプログラム

令和7年度本市における芸術振興推進事業
（ひろしまアーツカレント） 選定された協働型市民芸術家育成について、ハイブリッド型学習の場を創設する。



リフレクティング・ヒロシマ

異なる分野で活動するアーティスト、ダンサー、アートマネージャーが相互に
関わりながら、広島で対話を通じた表現活動を行うことを目的とした共同体

個展開催地でもある
アートギャラリーミヤウチスタッフが、
企画・運営者のリフレクティング・ヒロシマと
前田を支えてくれました。



「前田耕平」コスモレジデンス 開催中！
2025/11/15-2026/1/25 まで



リフレクティング・ヒロシマでは
アートマネージャーの視点から伴走する
タメンタイギャラリー鶴見町ラボ。
本展会場としてだけでなく、
企画全体の運営サポートや
広報支援も行う縁の下の力持ち。



閉じなかった円環 — 「雁の便り」プロジェクトを振り返る

吉田真也（リフレクティング・ヒロシマ）

まだ薄暗い河口付近で一行は、車に積んだ筏を降ろし、川岸まで運んでいる。その場を照らすライトも無いので、上手に川辺の状況や互いの距離感を測りながら、会話もそこそこに各自の準備に集中している。不意におとずれる波に軋む竹製の筏を櫂で操りながら、アーティストの前田耕平はスタート地点であるバイパス道路の真下から遡上を開始する。次第に曙光に照らされた広島工業地帯が姿を見せ始める。時折曇り空の切れ目から差し込む微光を水面が反射させ、水鏡の風景と実像の風景がつくり出す相互反響の臨界面を、前田を乗せた筏は滑っていく。現場を支えるスタッフは、撮影者、安全班、連絡係、ドライバー等、各々の役割ごとに散り散りとなって、一人筏を漕ぎ進める前田の動きを想像し、天候を見定め、全体の状況をチャットのやり取りで把握しながら自らの行動を選択していく。それぞれの地点から見えざる地点の存在を想像し、繋がり合う奇妙な共同体の連動性。やがて筏は一人目の乗舟者の待つ雁木に着岸し、パフォーマンスが始まる。

「雁の便り」と題されたプロジェクトは、前田と受講者による、川や舞台装置に見立てられた雁木を舞台としたパフォーマンスで最盛を迎え、その後タメンタイギャラリーで開催されたアーカイブ展によって一旦の終結となった。しかしながら“若手芸術家育成事業”である本プロジェクトはそこに至るまでに、フィールドワーク、受講者の募集、面談、計三回のワークショップ、リハーサルなど多くのプロセスが重ねられた。多様な年齢層の受講者の他に運営部、大学関係者、ギャラリスト、デザイナー等々様々な立場の人々が参画することでこのプロジェクトは成し遂げられた。彼ら彼女らを、一つの肩書きで表すことはできず、作家でありながら運営に従事する者、学芸員でありながらパフォーマンスする者、参加する人は自分の役割を変質させながら状況に対応した。そうした複雑な共同体の在り方は、人々が一つの目的のために共同して動くことの可能性/不可能性を顕在化させ、プロジェクトの在り方そのものを問うかのようなものである。前田や運営のリフレクティング・ヒロシマが一時的に構築したプラットフォームでは、多様な人々が相互に関わり合うことで開かれる表現の可能性が生起されたが、同時に、関係し合う中で摩擦や不和があったことも否定

できない。各々がプロジェクトの理想を思い描き、真摯に向き合うとすればそうしたことが起こるのも当然であり、プロジェクトはそうした感情の渦も内包しながら進んでいった。

プロジェクト/Project = 投企によって如何なる企てや問いが社会や土地に対して投げかけられたのだろうか。そう批評的に省みたとき、整然としたルールが敷かれ、偶発性を半ば失った都市における遊戯的営みの回復であったと、ひとまずは書いておく。人類史上、初めて原子爆弾が投下された広島市では、戦後復興する過程で「安全・安心」という理念が先立った。しかし安全を意味するSecurityという言葉に、管理・警備の意味が含まれているように、安全な都市形成の裏側では、市民の営為の管理、身体の統率、マイノリティの排除がしたたかに執り行われてきたこともまた事実である。川でのパフォーマンスを実施するにあたり、私を含めた関係者が最も懸念したのも安全性であった。最もこれは広島だからというわけではなく、大学との連携事業であること、老若男女の受講者を考えれば当然の配慮であった。

こうした都市や組織の在り方に対し、前田や乗舟者の身振りはそれとは全く違った人間の営みの可能性を開示する。天候の変化や潮の流れをその身で感知し、コントロール不能な自然と対峙し、時に風や潮、波の力を借りて筏を進める。子どもの時に誰もが体験した、危険を伴った自然との遭遇。その戯れ。忘れかけていた高揚を呼び戻しながらパフォーマンスを行う乗舟者の身体は遊戯性を帯びる。かつての船着場という役目を終えた雁木に新たな営為を吹き込みながら、繋がれていく乗舟者たちの“あそび”の連鎖は、整備された平和都市に新たな通路をしなやかに開く。

今回前田が乗舟者とともに辿った川の道は、広島市をぐるりと周回する道筋であったが、その円環は完全には閉じなかった。作家はその道を繰り返し通って広島市に入る事はなく、便り/頼りを託し、もとある拠点へと帰っていく。作家と広島の関係性は続くであろうが、その川の



道を再び通ることはないだろう。一回限りのプロジェクトであり、一過性の共同体の渦。だからこそ、この土地や我々に投げかけられたこの問いを繰り返し省み、その時々に応じて語り直していく必要がある。その務めはこの土地に残る側に託されている。

講師 Instructor

前田 耕平 MAEDA Kohei

アーティスト

1991年、和歌山県生まれ。現在、兵庫県在住。2017年京都市立芸術大学大学院美術研究科絵画専攻構想設計修了。ルーツとなる紀伊半島での風土や体験、同郷の博物学者である南方熊楠の哲学を根幹に「自然と人の関係や距離」をテーマに活動。国内外の自然地形や生態系、文化や信仰に目を向け、フィールドワークから、写真、映像、パフォーマンス、インスタレーションなどの作品を制作。近年は「高瀬川モニタリング部」や、「動物園の未来ラボ」プロジェクトなど多様な活動を行う。

連携団体 Partner Organization

Reflecting Hiroshima - リフレクティング・ヒロシマ

広島ので異なる分野で活動するアーティスト、ダンサー、アートマネージャーらが相互に関わりながら、対話を通じた表現活動を行うことを目的とした共同体。(I) 死者や他者と出会い直す (II) 場所性の回復 (III) 歴史への応答、を軸に様々なプログラムの実践を行う。

Reflecting Hiroshima

A community formed in Hiroshima where artists, dancers, and art managers active in different fields engage with one another and pursue expressive activities through dialogue. It implements various programs centered on: (I) reconnecting with the deceased and the Other, (II) restoring a sense of place, and (III) responding to history.

プロジェクト6

自然・文化芸術資源の記憶にアクセスし、 利活用する

Accessing and activating the memory of natural and cultural resources

プロジェクト代表

石谷治寛（広島市立大学芸術学部准教授）

6-1 企画・講師

鹿田義彦（アーティスト／デザイナー）

稲津あや子（広島市立大学芸術資料館 学芸員／デジタルアーキビスト）

6-2 企画・運営

アートギャラリーミヤウチ

自然・文化芸術資源の記憶にアクセスし、 利活用する

本プロジェクトでは、地域のアーカイブ文化の醸成を目標にしながら、自然環境の文化資源の継承に発展できるリサーチや聞き取りの技術を高めます。

「アートとデザインを通した写真資料の編集的活用を考える」では、川や山の植生をテーマにしたリサーチ・ベースのアート作品・プロジェクトの掘り起こしのための学習会を行い、それらを踏まえたうえで、創作に活かすための資料利活用の方法を学びます。受講生は、資料・作品のキュレーションなどを提案し、展覧会を企画します。

「AtoM Hiroshima ハッカソン」では、アーカイブ・マネージメント・システムAtoM (Access to Memory) を情報保管のデジタルツールとして活用し、自然・歴史文化資源情報をデジタルアーカイブに登録する仕方を学びながら、それを芸術家や文化環境従事者が利活用する方法を模索します。

This project aims to cultivate a local archival culture while enhancing research and interview techniques that contribute to the transmission of cultural resources within the natural environment.

“Considering the Curatorial Use of Photographic Materials through Art and Design” involves study sessions that explore research-based artworks and projects themed around rivers and mountain vegetation. Building on this, participants will develop methods for utilizing materials to inform creative practice. They will curate materials and works, and plan related exhibitions.

The “AtoM Hiroshima Hackathon” utilizes the archive management system AtoM (Access to Memory) as a digital tool for information storage. Participants will learn how to register natural and historical cultural resource information in a digital archive, while exploring ways for artists and cultural practitioners to utilize it.



2025年度プログラム

アートとデザインを通じた 写真資料の編集的活用を考える

アーカイブ活用の実際を知ろう！

日時 2025年9月6日（土）13:00-16:00

会場 広島市現代美術館

アーカイブの何が面白いのか？

日時 2025年9月13日（土）13:00-17:30

会場 広島市立大学

アーカイブ活用の企画をしよう！1

日時 2025年11月1日（土）13:00-17:30

会場 広島市立大学

アーカイブ活用の企画をしよう！2

日時 2025年11月15日（土）9:00-12:00

会場 広島市立大学

アーカイブ活用の企画をしよう！3

日時 2026年1月31日（土）13:00-16:00

会場 広島市立大学

講師 鹿田義彦、石谷治寛、稲津あや子

AtoM Hiroshima ハッカソン

日時 2025年11月8日（土）-9日（日）11:00-18:00

講師 松山ひとみ

運営 アートギャラリーミヤウチ

アートとデザインを通じた写真資料の編集的活用を考える

報告 鹿田義彦

アーカイブ活用の実際を知ろう！

日時 2025年9月6日（土）13:00-16:00

会場 広島市現代美術館

講師 鹿田義彦

広島市現代美術館で開催された企画展「被爆80周年記念 記憶と物 —モニュメント・ミュージアム・アーカイブ—」（2025年6月21日（土）—9月15日（月・休））を見学し、現代美術分野におけるアーカイブ活用の事例研究を行った。前半のリサーチでは、企画担当学芸員の松岡剛氏より、企画構成や出品作品についてウォークスルー形式で解説を受けた。その後は参加者各自による自由見学とし、ワークシートに事例を記入しながら展示を視察した。

後半のディスカッションでは、各自が見出したアーカイブ活用の事例を共有し、該当作品について意見交換を行った。資料の創造的活用や、個人的・集団的アプローチの差異、歴史的資料の扱いに内在する倫理的課題などについて議論が及び、アーカイブ活用に関する多角的な知見を共有する機会となった。



アーカイブの何が面白いのか？

日時 2025年9月13日（土）13:00-17:30

会場 広島市立大学

講師 鹿田義彦、石谷治寛

本講座は、参加者全員でアーカイブの魅力幅広く共有することを目的として実施された。前半では講師の鹿田義彦氏が、アーティストおよびデザイナーとしての立場から、自身の創作におけるアーカイブ活用の事例や、原体験としてのアーカイブとの出会い、芸術教育との関わりについて紹介した。

後半では石谷治寛氏が、アーカイブの基本概念を整理したうえで、本年の欧州における展覧会から活用事例を紹介し、現代アートの重要なテーマである「里山と川辺」に着目した表現について図示を交えて解説した。各レクチャーは参加者からの質問や感想を受けながら双方向的に進行し、結果として参加者のアーカイブへの関心を喚起するとともに、今後の実践や思考を深める契機となり、以降の実践的講座に向けた有意義な準備機会となった。





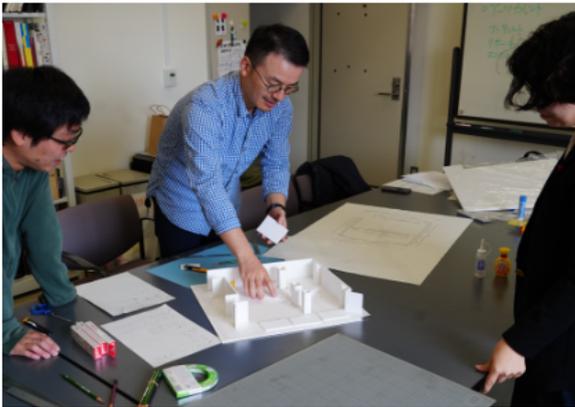
アーカイブ活用の企画をしよう！1

日時 2025年11月1日（土）13:00-17:30

会場 広島市立大学

講師 鹿田義彦、稲津あや子、石谷治寛

美術館での視察および講師による講義を踏まえ、資料館アーキビストと協働し、アーカイブを主題とした展示企画の立案を行った。当初はデジタルアーカイブの検索、実物資料の確認、展示室の視察を予定していたが、受講生欠席のため、これまでの講座での議論を振り返りつつ、講師陣による成果展に向けた検討を行った。企画立案にあたっては、受講生から提示されたアイデアを尊重し、「アーカイブをアートを通して活用する」という本講座の目標を展示として提示し、鑑賞者が学びを得られる内容とすることを重視した。展示空間は三分割し、アーティスト、リサーチャー、エンジニアという異なる立場による視点から構成する方針とし、展示の核となる資料の検討や、展示空間および収蔵資料の確認を行った。



アーカイブ活用の企画をしよう！2

日時 2025年11月15日（土）9:00-12:00

会場 広島市立大学

講師 鹿田義彦、稲津あや子、石谷治寛

アーカイブ利活用の試案を三つの視点で構成することを念頭に、その検討プロセス自体を展示へ映し出すため、参加者全員で資料館の簡易模型を制作する活動を中心に据えた。従来は言語や視覚による議論が主体であったが、身体的に展示空間を捉え直し、手作業を通じてスケールや規模感を共有し、また目に見える協働によってチーム力を高めることを目的として実践した。模型制作の過程では、展示物と配置への立体的な視点が生まれ、さらにエンジニア視点ではプランニングを支えるオンラインツールの必要性が喚起されるなど、今後につながる副産物も得られた。工程を共有したことで展示プランに具体的な実感が生まれ、各自の役割分担と次回までの課題も明確化された。



アーカイブ活用の企画をしよう！3

日時 2026年1月31日（土）13:00-16:00

会場 広島市立大学

講師 鹿田義彦、稲津あや子、石谷治寛

本講座の最終回として、展示プランの確認、検討、展示計画の決定までを行った。展示プランの確認では、会場構成のブラッシュアップをしつつ、各視点による構成要素の進捗状況を共有した。

検討の段階では、アーティスト視点、研究者視点、エンジニア視点として分割していた空間を一体化し、本活動のこれまでを報告する視点、展示内容として資料館の収蔵作品・アーカイブの陳列による意味の生起を図る視点、展示プランを練るプロセスに有効なデジタルツールをデモ的に提案する視点、に更新した。以上のディスカッションを通して新たな展示計画にアップデートするとともに、このプランを本活動の目標であった「展示企画の立案」として位置付けることで、全員で計画の完成まで至ることができた。

「アートとデザインを通じた写真資料の編集的活用を考える」 講座で企画した展示の設営の様子

デジタルアーカイブの活用と実践に関する実験的な企画として、本講座内で作成した展示プランを基に、「広島市立大学デジタルアーカイブ公開記念展」の一角で成果展示を行った。

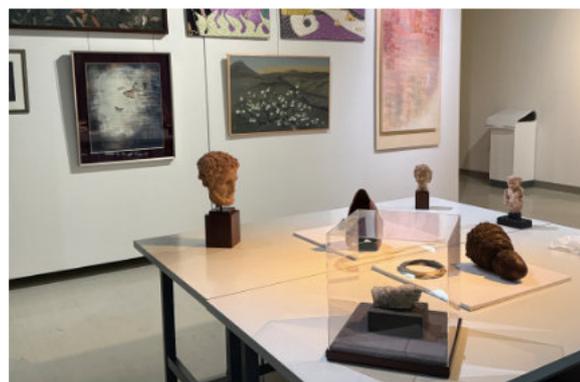
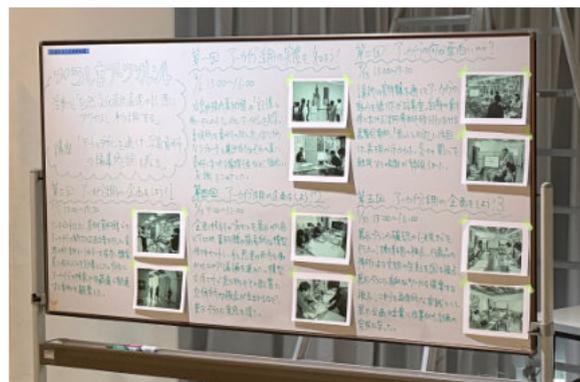
広島市立大学デジタルアーカイブは、大学がこれまでの特色ある教育研究活動を通じて蓄積してきた芸術創作品・芸術資料および平和を築く文化資産となる学術資料をデジタル化し、公開するものである。

本アーカイブの公開を記念し、広島市立大学芸術資料館にて「広島市立大学デジタルアーカイブ公開記念展」が開催された。本展示では、構築に込めた想いやプロセスの紹介に加え、会場に設置した端末を用いて、実際にデジタルアーカイブを体験できるデモンストレーションを実施した。

広島市立大学デジタルアーカイブ公開記念展

日時 2026年3月3日（火） - 3月9日（月）10:00-17:00（土日は16:00まで）

会場 広島市立大学芸術資料館 5階展示室





講師 Instructor

鹿田 義彦 SHIKADA Yoshihiko

アーティスト／デザイナー

2012年広島市立大学大学院芸術学研究科博士後期課程修了、博士（芸術学）。地域の特色を活かした芸術祭や産官学連携のアートプロジェクトおよび国内外での展覧会を中心に、現代美術、コミュニケーション・デザイン、写真研究など視覚芸術の領域を越境する活動に取り組む。基町プロジェクト「基町写真展」ディレクター（2015年～現在）、広島市現代美術館企画協力（2021年～現在）、広島における写真表象のリサーチプロジェクト「広島写象」主宰（2022年～現在）など。

稲津 あや子 INATSU Ayako

デジタルアーキビスト／広島市立大学芸術資料館学芸員
広島市立大学芸術資料館で展覧会企画運営、収蔵作品のデジタルアーカイブ化を担当。ほか、地域とアーティストの関係を軸に芸術を通じた「場づくり」や国内外のアーティスト・イン・レジデンスの比較研究を行い、広島市の横川地区にあるアート施設「Hiroshima AIR Gallery/Studio」の運営に関わる。

石谷 治寛 ISHITANI Haruhiro

活動代表者プロフィールページ（100P）に記載。

AtoM Hiroshima ハッカソン

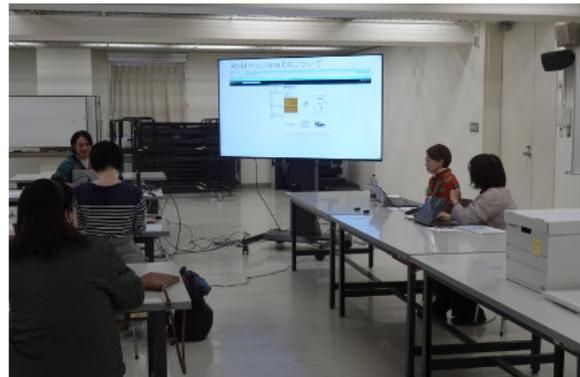
報告 藤田えりか（アートギャラリーミヤウチ）

日時 2025年11月8日（土）-9日（日）各日11:00-18:00

会場 広島市立大学

講師 松山ひとみ

協力 アートギャラリーミヤウチ（公益財団法人みやうち芸術文化振興財団）



アーカイブの基礎から実践までを2日間にわたり学ぶ講座を開催した。

1日目午前は松山氏によるアーカイブ全般の講義を行い、午後はAtoMの概要説明、導入事例、ログイン方法、ユーザー権限を確認した上で、アートギャラリーミヤウチの収蔵資料を用いて、実践に取り組んだ。付箋の扱いや保存・破棄の判断など作業中に生じた疑問を共有しつつ、松山氏の助言を受けながら進めた。参加者は資料をもとにワークシートを作成し、AtoMに入力する過程で、典拠レコードや主題タグ、関連美術館の範囲情報などAtoMの特徴を理解した。講評後は混在資料の扱いやAI活用、無名作家作品の保存、大型作品の管理などの課題に松山氏・石谷氏が回答。アーカイブに必要な情報はISAD(G)やダブリンコアなど標準化されたメタデータの記述方式に沿って整理することが近道であると実感し、AtoMで全体像が把握しやすい利点も確認できた。1日だけの参加者も、作品資料の進め方について直接相談できた点が有意義であった。



2日目の冒頭では前日の復習として、灰谷コレクションや鼻コレクションを例に、AtoMでの入力項目を一つひとつ丁寧に確認した。資料情報と入力項目の対応関係を検討するなかで、どの項目に位置づけるべきか迷う場面も見られたが、その過程を通して、国際標準であるISAD(G)に基づいた記述の枠組みが、資料を的確に整理・共有するうえで有効であることを改めて実感した。午後は、石谷氏の父親の建築事務所資料を例に、石谷氏から遺品整理の経緯や公開判断の難しさを共有。続いて参加者の持参資料に基づき作業を進め、参加者からの要望により、低予算で可能なiPhoneによるオーバーヘッド撮影やAtoMでの画像一括登録の方法も紹介した。終盤では学びと今後の目標を共有し、AtoMの多言語対応や個人利用の意義、市民による価値判断で資料を残す重要性など、多角的な意見が交わされた。2日間参加した受講者からは、具体例が理解を深め自信につながったこと、また異分野交流の機会として非常に貴重だったとの声が寄せられた。



講師 Instructor



松山 ひとみ MATSUYAMA Hitomi

視聴覚メディアアーキビスト

アムステルダム大学大学院修了後、東京国立近代美術館フィルムセンター（現・国立映画アーカイブ）特定研究員として、ウェブサイト「日本アニメーション映画クラシックス」の構築・公開などに従事した。2017年からは関西に拠点を移し、大阪中之島美術館アーカイブズ情報室の開設を担う。所蔵美術資料の可視化のため、所蔵フローの見直し、データベース構築のほか、利用者サービスの導入・運用を行った。現在は、国立公文書館認証アーキビストとして、複数の記憶機関のアーカイブズ整理・運用業務などに携わっている。



連携団体 Partner Organization

アートギャラリーミヤウチ（公益財団法人みやうち芸術文化振興財団）

公益財団法人みやうち芸術文化振興財団の施設として、2013年に広島県廿日市市宮内に開館。2020年からは博物館相当施設として小さな美術館の機能を持ちながら、現代美術の企画を中心に、広島ゆかりの作家や若手作家を紹介する企画展、児童向けの創作ワークショップなど幅広い事業を展開。また、滞在制作やアーティストによる企画展示のコーディネート等も行う。コレクションとしては、寄贈を中心に主に1940～80年代に制作された広島ゆかりの作家の作品や、廿日市市や宮島に関連する作品、若手アーティストの作品を収蔵。



Art Gallery Miyauchi (Miyachi Foundation for the Promotion of Arts and Culture)

A facility of the Miyachi Foundation for Art and Culture, a public interest incorporated foundation, opened in Miyauchi, Hatsukaichi City, Hiroshima Prefecture in 2013. Since 2020, it has functioned as a museum-equivalent institution with the capacity of a small art museum, developing a wide range of programs centered on contemporary art, including exhibitions introducing artists connected to Hiroshima and emerging artists, and creative workshops for children. It also coordinates artist residencies and artist-curated exhibitions. Its collection, assembled primarily through donations, includes works created mainly between the 1940s and 1980s by artists connected to Hiroshima, works related to Hatsukaichi City and Miyajima, and works by emerging artists.

記録を運用し、場をつくる：資料の手触りを展示・データへ

石谷治寛（広島市立大学芸術学部准教授）

活動6は、地域のアーカイブ文化を醸成し、自然環境と結びついた文化資源の継承に向けて、リサーチ／聞き取り／整理／利活用の技術を段階的に学ぶことを目的として実施された。プログラムは大きく二本立てで、①現代美術分野のアーカイブ活用事例を参照しつつ展示企画へ接続する「アートとデザインを通じた写真資料の編集的活用を考える」、②デジタルアーカイブ基盤（AtoM）への登録と利活用を体験する「AtoM Hiroshima ハッカソン」から構成される。

①では、広島市現代美術館で開催された企画展の視察を通して、アーカイブ活用の具体的事例を「現場で読む」ことから始まった。議論は、資料の創造的活用、個人的／集団的アプローチの差異、歴史的資料の扱いに内在する倫理的課題にまで及び、アーカイブを「保存」ではなく、どのように利活用できるかという問いから始めることができた。

中盤以降は、資料館アーキビストとの協働を前提に、成果展に向けた展示企画の立案へと進んだ。受講生から提示されたアイデアを尊重しつつ、「アーカイブをアートを通して利活用する」という講座目標を、鑑賞者が学びを得られる展示として提示する方針が確認された。

この企画過程の特徴は、検討プロセス自体を展示へ映し出すことを意識し、参加者全員で資料館の収蔵庫に訪れ、簡易模型を制作した点にある。言語・視覚中心の議論に偏らず、手作業を通じてスケール感や配置の感覚を共有し、目に見える協働を生むことでチーム力を高める、という「身体化された設計」の回路が実践された。模型制作は、展示物と配置への立体的視点を生み、エンジニア視点からはプランニングを支えるオンラインツールの必要性が喚起されるなど、後続の運用改善にもつながる副産物を得た。

展示空間は当初、アーティスト／リサーチャー／エンジニアという三つの立場から構成する案が採用されたが、最終回で、実際に企画を具体化するための確認と議論を行い、核となる資料の検討や展示空間・収蔵資料の再確認が行われた。それによって、3月の学内のデジタルアーカイブ展示に向けて、実現可能な内容に落とし込むことができた。展示では、シミュレーターを中心に、資料館の自然を元にした工芸

（漆や金工）や風景画（日本画や油絵、版画を含む）を、資料館の一角にオープンストレージとしてゆるやかに配置する展示設計が実現した。

②として実施された「AtoM Hiroshima ハッカソン」（2025年11月）は、アーカイブの基礎講義からAtoMの導入（ログイン・権限確認）を経て、アートギャラリーミヤウチの収蔵資料を用いた登録実践へ進んだ。作業の過程で、付箋の扱いや保存／破棄の判断といった現場の迷いが共有され、助言を受けながら整理が進められた。参加者はワークシート作成と入力作業を通じて、典拠レコード、主題タグ、関連機関係情報など、AtoMの特徴を具体的に理解した。

ISAD(G)など、標準化されたメタデータの記述の枠組みは、「ただの形式」ではなく、地域の記録を共同で扱い、次に使える形で引き渡すための条件として捉え直すものである。アーカイブ学では、資料の来歴を残す必要性が議論されてきた。一般的にデジタルデータベースの入力として想像される資料アイテム毎の記入よりも、フォンドを単位として資料体を構造化し、その記述を公開・共有する作業こそが、資料の出所、状態、内容を共有し、将来の保存・利活用に資するはずである。一点一点の資料把握は、その後に整理計画や予算策定や人員配置を具体化してから進めればよい。本ハッカソンで共有できたのは、デジタルアーカイブを進める前提条件の理解だった。

受講生からは熱心な質疑応答やそれぞれのアーカイブの必要性が語られ、個別的な状況の共有も意義深いものだった。芸術団体や芸術家の遺族だけでなく、福祉団体、図書館司書、国際的な取り組みをする平和研究者など、さまざまな現場からアーカイブへの関心と、直面している困難さが浮き彫りになった。その意味で、AtoMをアーカイブについて学び、今後、団体を越えた共有資源の情報管理ツールとして活用する課題の重要性が認識された。

とはいえ、個人や団体は日常業務の中で膨大なタスクを抱えており、資料整理やアーカイブ整備は二の次になりがちであることも事実である。そうした状況の中で、やや学習コストの高いアーカイブについての理解を高め、実務作業に組み込めるかは今後の課題である。たと

えば、聞き取りメモをISAD(G)にインポート可能なXML形式にAIを用いて変換するなど、将来のテクノロジーを見越したマニュアルや活用法の提案も必要であろう。

総じて活動6は、アーカイブを「保存の技術」として閉じず、展示・教育・デジタル基盤・協働の設計へ開いていく実装的な講座となった。講師陣からは次のような手応えが共有された。「受講生の個別の動機に応じた関わり方ができたことに、最も効果を感じた」。「今回のように一般募集で集まった受講生に対して共有することを通して双方に理解を深めることができた」。「今後も勉強会やハッカソンのようなイベントの実施を続けたい、また、続けることが大事だと考えている」。本講座は、地域におけるアーカイブ文化の基盤を「学びの形式」として立ち上げ、参加者が実務と創造を往復できる回路を具体化したこと、自然との触れ合いだけでなく、資料の手触りをデータへと変換する作業の身体性を開く場を持たせたことで、年度活動の中核的成果の一つになったと言える。

活動報告会・シェアリングセッション

Activity Report Meeting and Sharing Session

Sharing Session

ひろしまアーツカレント プロジェクトメンバーによる シェアリングセッション

日時 2026年2月16日（月）10:30-14:30

会場 広島市立大学近隣の古民家

参加者 石谷治寛（事業代表 プロジェクト2・6代表）
長坂有希（プロジェクト1代表 プロジェクト2講師）
福田恵（プロジェクト3代表）
近藤有季（プロジェクト3講師・連携団体）
藤江竜太郎（プロジェクト4代表）
川端万結子（プロジェクト4スタッフ）
ジョン・テヨン（プロジェクト4スタッフ）
吉田真也（プロジェクト5代表）
鹿田義彦（プロジェクト6講師）
藤田えりか（プロジェクト6連携団体）
今井みはる（プロジェクト6連携団体）
湯浅正恵（シンポジウムコメントーター）

河田百代（運営スタッフ）
村上明花里（運営スタッフ）
松永美由紀（運営スタッフ）

協力 平岡尚子

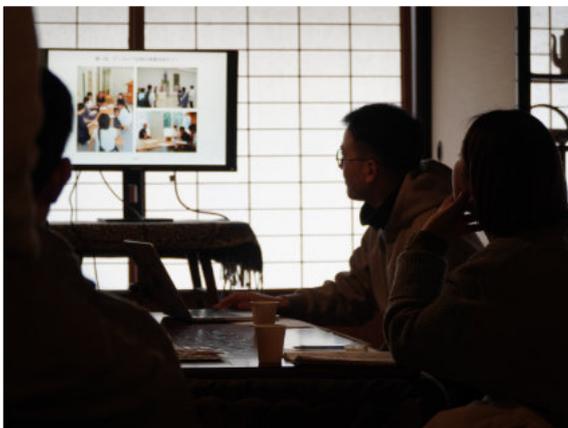




築約130年の歴史を持つ古民家を会場に、今年度のプロジェクトに関わった代表者や講師、スタッフ、連携団体メンバーが集まり、1年間の活動報告会とシェアリングセッションを行った。

午前の部では、各活動代表者による発表を実施。スライドや写真を用いながら、この1年で取り組んできた内容、成果、そして直面した課題が共有された。同じ事業内のプロジェクトではあるものの、活動がそれぞれ独立して進められていたため、関係者にとっては他の活動の全体像を初めて知る機会となった。参加者はときに質問を挟みながら、興味深く発表に耳を傾けていた。

6つのプロジェクトの発表が終了した後の昼休憩では、古民家の囲炉裏を囲み、参加者が持ち寄った料理を味わいながら、プロジェクトの垣根を超えた交流が自然と生まれた。



午後の部では、参加者全員によるシェアリングセッションを実施。活動の中で感じた課題点や、来年度に向けた取り組みを主なテーマとして、主催者・学生・マネジメントのそれぞれの視点から活発なディスカッションが行われた。プロジェクトを立ち上げるにあたりマネジメントの重要性を再認識する声や、継続的に参加する受講生が徐々に減っていくという課題などが挙げられ、それらに対するアイデアが多方面から提案された。補助スタッフとして関わった学生の意見も加わり、課題解決の糸口を見出すことができた。さらに、報告会の内容を踏まえ、運営側がプロジェクトを横断して参加できるような体制づくりの提案もあげられるなど、終始意欲的な議論が繰り広げられた。古民家の温かい雰囲気も一助となり、誰もが発言しやすい空間が生まれていた。

今回の報告会とシェアリングセッションを通じて得られた気づきや課題を土台に、今後はプロジェクトの横断的な連携を見据えながら、個々のプログラムの強みや個性を活かした学びの場を目指していきたいと考えている。地域と参加者、そしてプロジェクト同士がより豊かに交わる場を育てることで、持続的で開かれたプログラムへと発展させていきたい。



プロジェクト代表者紹介

長坂 有希 NAGASAKA Aki

広島市立大学芸術学部講師、香港城市大学クリエイティブ・メディア学科博士課程研究員。個人的な出会いと協働を通して、さまざまな人や生き物、ものたちが守り続けてきた知恵や技術、物語や歴史について学ぶことに関心を持っている。また、活動から得た彼ら・彼女らの声や世界観や、うまく機能していないように見える社会的、政治的、環境や生態学的な構造への疑問をストーリーテリングを用いて表現し、個人の日々の思考や行動のレベルからどのような変化をもたらすことができるかについて考えている。

石谷 治寛 ISHITANI Haruhiro

広島市立大学芸術学部准教授。十九世紀フランス美術と視覚文化やアナキズムに関する学術論文を発表。外傷記憶を扱う現代芸術に関する論考多数。また、メディア芸術の保存とアーカイブに関するプロジェクトにも取り組んできた。広島では都市への芸術介入を調停する人材育成を目指すHACH（広島芸術都市ハイヴ）の運営をはじめ、文化メディアーションについて考察している。

福田 恵 FUKUDA Megumi

安田女子大学家政学部造形デザイン学科講師。Yellow River Collegeメンバー。大学終了後ドイツに留学。ベルリンを拠点に様々な国際文化交流事業に作家として選出される。国内外での個展、グループ展、レジデンス招聘多数。現在、広島を拠点に芸術文化を担う次世代の教育活動にも携わりながら、表現媒体や分野にとらわれず、記憶、場の固有性と密接な作品を手がけている。

藤江 竜太郎 FUJIE Ryutaro

広島市立大学芸術学部准教授。これまで自らの心の拠り所として、自然との対話を目的とした活動を続けてきた。アート概念にとらわれることなく、素直な気持ちのまま自然と向き合い、自然を受け入れ、自然と遊ぶ。その行為から感じられる喜びや感動を、私が生きる証として存在させたいと願っている。これらの概念を基に、より健康的な街づくりに役立つ仕組みづくりを創造的に行う。

吉田 真也 YOSHIDA Shinya

リフレクティング・ヒロシマ プロジェクトメンバー。アーティスト。秋田公立美術大学と東京藝術大学大学院で学んだのち、現在は広島県を拠点に活動している。現実とフィクションの境界を横断しつつ、文化的、歴史的な変遷を経て形成されていく土地固有の営みに着目し、個人と土地との間で折重なる複数の記憶を呼び覚ますような作品を制作している。

謝辞

本プロジェクトの遂行にあたり、連携団体ならびに講師の皆様より多大なるご協力を賜りました。
ここに関係者各位のお名前（敬称略）を記し、謹んで御礼申し上げます。

YOSHIKATSU/吉勝制作所

Yellow River College

Reflecting Hiroshima - リフレクティング・ヒロシマ

一般社団法人 River Do! 川辺コンソーシアム

広島湾岸トレイル協議会

SATOMACHI

アートギャラリーミヤウチ（公益財団法人みやうち芸術文化振興財団）

タメンタイギャラリー鶴見町ラボ（タメンタイ合同会社）

広島市現代美術館

MAGICISLAND

熊原康博

吉田晴彦

梶山健治

川本誠

山本愛子

吉田勝信

石倉敏明

湯浅正恵

石松紀子

古堅太郎

前田耕平

中川晶一郎

倉本裕梨

本坊由華子

鹿田義彦

稲津あや子

松山ひとみ

ひろしまアーツカレント

里山と川辺の複数種共有空間を開いて、ハイブリッドな学びの場を創発する
令和7年度活動記録集

主 催 公立大学法人 広島市立大学
助 成 令和7年度大学における芸術家等育成事業

執 筆 石谷治寛 長坂有希 堀口智尋 湯浅正恵 福田恵 本間美穂子
藤江竜太郎 吉田真也 鹿田義彦 藤田えりか 村上明花里

編 集 石谷治寛 河田百代 村上明花里

翻訳校正 Boat ZHANG / 張 小船

撮 影 石谷治寛 音美 五十嵐ヨウ 浅野堅一（Delta Photography）
Yellow River College ハシモトデザイン 倉本裕梨
リフレクティング・ヒロシマ 河田百代 村上明花里

デザイン 増田純

印 刷 株式会社グラフィック

発 行 公立大学法人 広島市立大学
〒731-3194 広島市安佐南区大塚東三丁目4番1号

発 行 日 2026年3月

